

爾の性靈を宅らしむ、眼耳の窓牖、手足の檐楹あり。喉腹の嘘吸は、匏管竽笙のごとし。

竽笙は二の樂器なり、皆匏を以て之を爲る。匏は瓠なり、管を匏中に列ね、簧を管端に施す。竽に三十六簧有り、笙の大なる者は十九簧、小なる者に十三簧、皆嘘吸聲を取る。此に謂ふこゝろは、人の腹は匏瓠の如し、喉は簧管の如しとなり。

朝霞夕霧、閃電流星、倏ち晷に忽ち滅す。暫く積んで時に明かなり。切磋窮究して、期すること俊英に在り。他習を簡略して、此の經を熟玩せよ。

人の一身猶ほ屋舎のごとし焉、喉腹の嘘吸は猶ほ匏管の竽笙のごときなり。且つ是の身の堅久ならざること、何ぞ朝霞等の滅し易きに異ならん。此の經とは所謂此れ文字言語の經に非ず。風穴和尚の曰く、猶ほ恐らくは此の經に耽著して、放下すること能はず、而るを我れ今熟玩と謂ふ、寧ろ愧づると無けんや。

帝君

心王也。

將帥、宰執公卿、

帝の字より此に至る、共に八字を爲すは、以て八數を表す、將の字より以下、但だ六字を爲すは、以て六數を表す。双字義分る、則ち四人唯だ理、離合一三と爲す、意を以て之れを逆へて可なり。又大概後注に見えたり。

疆場を統治し、

場は亦音。

用兵を防禦す。擒捕誅斬して、冠纓に保任す。

業識昏亂、本末重輕あり。

肝を磐き膽を礪く、深く

刻み深く銘す。折旋俯仰、權衡を揣摩す。鬪枝鳩拙、狗苟蠅營、

猶ほ四大蛇の如き歟。風火は性輕し、語及び蠅に譬ふ、枝有りて能く

營む。地水は性沈む、鳩と狗とに喩ふ、鈍拙にして苟且なり。然も一靈

の眞性、湛然精明にして、是の如き事なし。久しく四大の幻軀に居るこ

と有るを以て、妄を逐ひ眞に迷ふ者其の氣に染習す。茲の習氣を以て、

空王大法の玄祚を紹がんと欲すとも、皆得べからず。

謀

心機の計議、猶ほ鬪の枝を用ふるがごとし。

置

なる」の句は有名なり。

②風穴。名は延沼、餘杭の人、臨濟下四世の法孫なり、南院慧順に嗣法して汝州の風穴寺に住し南院の法道大に振ふ、宋の開寶六年八月十五日に寂す。

③業識。業は起動の義なり、吾人の心識、本來起動の相あるを業識といふ。起信論義記卷中末に詳なり。

④四大。四大を蛇に譬へたるは大集經に出づる處なり、昔し一人あり、二の醉象を避けて藤に縁つて井に入る、黒白の二鼠あつて、藤を噛んで將に断たんとし、旁に四蛇あつて整まんを欲す、下に三龍あつ

弁置唐捐、鳩の以て拙なるがごとし。

倚

腥臭に營々すること、蠅の依倚するがごとし。

伏

卑鄙にして振はざることを、狗の偃伏するが如し。又世間一切相因の事を倚伏と曰ふ。老子の曰く、「禍兮は福の倚る所、福兮は禍の伏する所、孰れか其の極を知らん。」

墜墮覆傾す。父を捨て、逃げ逝きぬ。孤苦零丁たり、何ぞ中外に由らん。而も父寧を獲ん。

父音は藝、治るなり。

群魔最負し、

最是平秘の切、毛韻に、几利の切、員は虚器の切、力を用ひて壯なる貌なり。

六 賊縦横す。匹偶親屬、締構同盟、財賄を盜掠して、

掠音は略、劫奪するなり、賄は呼罪の切。

て爪を張つて之を拒ぐ、その人仰いで二象を望めば、已に井の上に臨む、憂懼して托するこまなし、忽ち蜂あり、過ぎて蜜を遺して口に滴る。この人、蜜を啖つて、危懼を忘る。智人は此を見て各宜しく修行し、速に此の難を脱すべし。

父を捨て、逃遁す。法華信解品の長者窮子の譬喩をいふなり。

六賊。色、聲、香、味、觸、法の六塵をいふ、此の六塵は能く慧命を損し、法身を傷壞するが故に名けて賊といふ。

三身。法、報、應の三身をいふ。四智は大圓鏡智、妙觀察智、平等性智、成所作智の四をいふ。六度は布施、淨戒、安忍、精進、禪定、智慧の六波羅蜜をいふ。波羅蜜は到彼岸を譯す、事業成就の義なり。

典刑を墜壞す。夙に興き夜に寐ね、神を聚め精を會して、我が穹壤を復す。水縁に山青く、余が邦邑を完うして、考妣合併せり。

此の經を玩ばんと欲するときは、則ち帝王の其の邦國を治むるが如し。

諸の將帥及び衆の臣下をして、兵を用つて征伐し、同じく冠纓の位貌を保たしむ。諸衆多しと雖も、本唯だ一人のみ。變化離合善惡定まらず、

或は三身・四智・六度・萬行となり、或は三毒・八識・六處・五陰となる、

大概此の如し、乃至八萬四千、無量無數、染淨塵勞の功德不可數なり。

善なるときは則ち俱に忠臣たり、否らざれば乃ち悉く逆賊となる。斯れ乃ち唯だ主たる者に在り。業に於ける識に於ける昏亂、或は本或は末の重輕、折旋俯仰の中に於て、揣つて之を察す。

其の重輕を權衡し、乃し其の肝膽を磨礪す。猶ほ貞石の堅平淨澤にして、深く刻して銘して以て之を記するがごとし。然れども倘し鑑等の如きは、或は枝を用ひ、或は唯だ拙、或は苟且、或は經營、

及び機謀・奔置・倚伏の事、是れ悉く其の家國の覆傾して、逃れ逝くに取るなり。是れに由つて生死

魔軍の衆、其の便に乗ずることを得、最負し、然も力壯の六賊を以て、合縱連横す。是の魔賊等、則ち乃し偶結して、親をなし盟を爲し、法財を劫し掠め、法度を破壞すること、既に乃ち是の如し。當に晨夕に於て、自ら奮つて悟を以て期と爲すべし。我が乾坤邦國を復し、乃し本來の山青水

綠、太平無象の境を享けて、而も亦方便の父、智度の母を失はずんば可なり。

雲臺月殿、露榭風亭、幽宮邃館、廣廈修城、朱甍畫閣、綉戶彤庭。

邦國既に復し、父母俱に會するときは、則ち是れ等の諸處安樂の受用有り、此れ即ち十二處の根塵歟。復た賊とならざれば、化して自家の臺殿爲つて、其の中に於て遊戯自在なる可し。

氣概を孕育して、香を變じ冥を化す。士を督し藝を弘め、農を勸め穡を力めしむ。文武官僚、士穀社稷あり、品級の雌雄、

雌雄とは乃し賢鄙勝負の義。雌雄を決すと曰ふが如きは、即ち是れ賢鄙の勝負を辨別す。賢勝つを雄と爲し、鄙負くるを雌と爲す。品級上下、進退賞罰、是れに由つて之を決す。此れ乃ち禽鳥の雌雄の故に、亦借つて英雄の字と爲すなり。凡そ大丈夫は必ず雄飛を慕ふて、雌伏を肯はずと、是れなり。禽の卵を抱くを伏と曰ふ。扶富の切。退黜進陟す。

都邑宮館、悉く數へて過覽す可からず、聊か雲臺等を擧ぐるのみ。蓋し有道の邦、渠渠の厦屋、廣覆含攝して、品物を孕育し、陰陽を變化するの氣象有り。小を以て之に喩ふ、朝廷に在るときは

①智度。智慧到彼岸の意にして、般若波羅蜜多なり。
②十二處。六根、六塵をいふなり。
③雌伏。伏は扶復の切、音「ふく」之讀むときは、雌伏はめん鳥の雄鳥に従ふ意にして、人の下に立つこといふ語となり、扶富の切、音「ふ」ならば、覆ふ意となり、雌鳥が卵をあたむる意となる。普通には前解に用ひるが、後解即ち本書の解が眞なるが如し。

即ち萬姓を畜養し、民を弔し罪を伐ち、賢愚を辨別し、百官を進退して、共に社稷を安んずるところ、宗門に在つて其の揆一なり。範を垂れ物を化するに至つて、萬類を指呼し、凡を轉じて聖となし、其の人人をして皆祖父の田園に復せしむるは、無盡の受用なり。

如來の達莊は、虚豁曠直なり。無來無去の大道、本名字無し、強ひて達莊途路を借つて、喩へて以て之を言ふ。謂はゆる此の道は、塞に非ず曲に非ず、下文の雞啼等の如きは是れなり。

雞啼犬吠、宣詔制勅し、一切聲、是れ佛聲なり。寸草莖芽、瑰顏偉色、一切色、是れ佛色なり。甘蔗の根苗、慈芻栽植す。

世尊別姓五つ有り、一には瞿曇氏、二には甘蔗氏、三には日種氏、四には舍夷氏、五には釋迦氏なり。慈芻は西國の草の名、五義の多きを含む、而して譯せず。一には體性柔軟、出家の能く身語龜麤なるを折伏するに喩ふ。二には蔓を引いて旁く布く、傳法度生、延綿して絶えざるに喩ふ。三には馨香遠く聞ゆ、出家の戒徳、芬馥として衆の爲に聞かるるに喩ふ。四には疾病を療ず、出家の能く煩

①達莊。＊道をいふ、爾雅の釋宮に「六達、之を莊といひ、九達、之を達といふ」と見えたり。故に達は九條に通ずる交道、莊は六方に通ずる＊道なり。茲には佛の方便多岐なるに譬へたるなり。

備毒害を斷つに喻ふ。五には常に日光に背かず、出家の人、常に光明を見るに喻ふ。所以に比丘此の草を以て喻と爲すことを得たり、稱して甘蔗種の後裔と爲すなり。獷は古猛の切。

彌綸は猶ほ纏裹のごとし、言ふところは周巾包裹すること、無窮の地に於てするなり。滋蔓羊綿、頗る甚だ近即、

中に就いて遠からず。

慮を深き猛省して、

心慮を洗滌して、深く之を省す。

駭を驅逼を待たん。淪溺を挺拔し、沈寥を較轆す。

較轆は音陵歴、踐み踏むなり。

脚踞擬議すれば、迂曲逍遙なり。槌拂控引し、棒喝呼招す。

頃刻も進まざるときは、則ち此の道に於て返つて曲遠を成す。故に槌を拈じ拂を堅て、棒を行じ喝

を行ずる擧令の事有り。

眉を齊しうし躅を共にし、

正知正見、師と異なる者無し。

貫を犯し條に違く。

格量に超越する者、又之れを出格の道人と謂ふ。以下の六句、當に類を以て觀るべし。

顛預備伺にして、

顛預は即ち僦伺なり、譬へば人有るが如し、面大にして肥え、眉目空隆の分無し、頸臆より洪にして、肩顛圓臣の別無し。又人有るが如し、樽鼻栴栴の物爲らんと欲して、先づ坏素の朴を成す、略似れども而も似ず。此れは宗師、或は提唱の語有つて、分曉著明ならざる者に喻ふるなり。嘗て他の書を見て、此の字に注する者あり。顛預の注に、大面と曰ふ。僦伺の注に、未だ器と成らざるを曰ふなり。直なり、是なることは則ち固に是なり、此れ乃し廣韻の中の注、其れ誰か非と曰はん。若し用處の意を顯明せんと欲すれば、則ち亦方便善巧を闕くのみに。

鑲琢鏤彫す。

喻へば宗師、或は語句を造作し、巧妙細密なること猶ほ金を彫り玉を刻

み、雪を琢き氷を鏤むるが如きなり。

氷壺耿介として、

潔清拔俗の貌、守る所の節を以て、堅正にして移らず、纖塵も染むること莫し。關市に飄飄す。

①貫。亦條理なり。

塵中に入つて、魚行酒肆、意を恣にして遊遊す。身を宇宙に當て、丹霄に獨歩す。輒を磨き礫を抛ち、鉢を拓き箱を負ひ、毬を輓じ笏を舞し、壁を觀ひ墻に面ひ、衷を罄し款を竭し、膈を裂き腸を抽んづ。

知識の人となり、互に主伴と作つて、人間世に應ず。或は齊眉共鬪、乃至獨歩より面墻に及んで、是れ諸の所作を示す。是れ皆其の誠款を罄し竭す。猶ほ其の智膈を裂き、其の腸を抽んで、而して相爲すの徹なるなり。

珂貝を汰洵し、靴糠を播揚す。假途の資斧、旅次の糶糧、

所謂相爲すとは即ち是れ洵汰なり、其の人を洵汰すること、珂貝の玉粒の如し。其の砂石靴糠を去つて、其の純粹ならんことを欲して、查洋有ることなし。以て假借途路、旅次の用と作して、家に到ることを期するのみ。明教の曰く、「如來を以て家となす。」

燕居鴻漸、

燕と宴と同じ、凡夫緇侶、居るときは即ち禪宴、出づるときは則ち序有り、鴻雁の漸次有るが如し。

百丈の曰く、「上堂陸座は主の事、衆徒は雁立して側ち聆く」といふ、是れなり。夫は音扶、語の詞なり。

蟻穴蜂房、

黄魯直、落星寺に題する詩に曰く、「密房各自に戸牖を開く、蟻穴或は夢に侯王となる。」謂ふこと、ろは寮舎之に似たればなり。又一首の内に曰く、「蜂房各自に戸牖を開く、處處茶を煮る藤一枝」と。

堂室に躋陞して、燈燭熒煌たり、鯨鐘鼙鼓、鼙は亦鐔に作る、並に音陀、魚の名、皮鼓を冒ふ可し。詩に、「鼙鼓逢逢たり」と。逢音は蓬。

塵柄貌床、砒薑鳩毒、

董は渠吝の切、毒草なり。唐の方士、張果先生、長年の秘術有り、自ら言ふ、「數百歳なるときは則天召し見えしむ。以聞す、董汁を飲んで苦きこと無き者は、眞の奇士なり」と。乃ち以て之を賜ふ。果飲むこと三扈、醺然として酔へるが如し。左右を顧みて曰く、「佳酒に非ず。」頃くあつて、齒は悉く焦黒す、鐵如意を取つて撃つて以て墮盡す、少選して新齒粲然たり。

●魚行、魚屋のこき、肆は店。
●頤を磨く。南嶽懷讓禪師が馬祖に禪の真相を示されたる喻なり。礫を抛つとは、香嚴智閑禪師が、瓦礫を以て竹を撃ち聲を聞いて省悟せられたるいふ。鉢を拓くとは徳山宣鑒禪師が一日鉢を擧げて法堂に至りたるをいふならん、時に雪峯、巖頭の間答あり。毬を輓すとは、雪峯義存の接衆の手段なり。
●明教。名は契嵩、蘇州鎮江の人にして、杭州の佛日寺に住す。明教の號は宋の仁宗より賜はりたるもの也。正宗記、定祖圖、鎮津文集等の著あり。

●黄魯直。名は庭堅、山谷と號す。宋の黄庶の子にして、分寧の人なり。詩に巧にして、世に蘇軾に配して蘇黄と呼ぶ。江西詩派の祖たり。その著に山谷集あり。禪法を黄龍の晦堂祖心禪師に嗣げり。逢々は鼓の聲の形容。
●方士。方術の士なり、長生不死の方術を授く。
●張果。道士なり、唐の恒州の中條山に隠れ、常に一白驢に乗じ、日に行くこと數萬里、玄宗召して光祿大夫に封じ、

酬酢の杯觴、絶後再び蘇す。汔はくは少しく康んず可し。

汔は許乙の切。爾雅に、「音は蓋、近なり、期なり、其なり」と。幾亦音

は祈。杜預が云ふ、「字別なり」と雖も皆義に近し。「言ふこゝろは其の近

當此の如し。毛詩の大雅、民勞の文なり。

頑癡懵懂、

恵あらずして心所知の者無し。

勉めて試み嘗みしむ。贈賈荏苒として、

贈賈は道を失ふなり、荏苒は猶ほ侵尋のごとし、苒染も同じ。

愧耻慙惶す。遊刃旁礴、周市備詳なり。寒暑を區別し、炎涼を組織す。暗

鳴叱咤、奔躍騰驤、

如し此の事を理會せんと欲せば、直に須らく刃を肯綮に遊ばし、萬物を旁礴し、乃至區別組織し、

叱咤騰驤等の作るに洎んで、文武をして兼ね備へ、八面に敵を受け、無窮の玄用、不盡の妙機、庶

はくは宗極を昭かにせしめよ。切に偏枯にして局ること一隅に在ること勿れ。

鈎錐砭箭して、存亡を辨験す。

砭は破験の切、石針病を刺すなり。宗師垂示の言句、或は之に似たり。學者虛實の病を以て、未だ

通玄先生と號す。本して後樓霞觀を立てて之を記れり。
爾雅。三卷十九篇あり、器具、天地、山川、草木、禽獸等を解釋したるものなり。作者詳ならず。周代より漢代に至る三朝間の諸人の作といふ。
杜預。字は元凱、晋の博學の人なり、春秋左傳集解を著す。
毛詩。今の詩經なり、も詩さいひしが、のちその所傳により魯人毛亨の傳ふるものなるが故に毛詩と名く。宋の朱子に至りて詩經といふ。

痛く錐箭を下して以て之を攻むることを免れず。其の所謂主人翁は存するや亡するやと觀て、然る

後療治す。故に學者をして入室せしむること有り。此れ乃ち特に鈎錐砭箭と爲すなり。

高庵悟和尚、衲子の室中、其の機に契はざる者を見る毎に、其の袂を把り色を正しうして、之を

責めて曰く、「父母汝が身を養ひ、師友汝が志を成す。飢寒の迫無く、征役の勞無し。此に於て堅確

精進して、道業を成辨せずんば、他日何の面目あつてか父母師友に見えんや」と。衲子聞いて泣涕

已まざる者有り。

履踐して讀誦し、登臨して歌嘯す。鯤を希ひ鼈を慕ひ、竿を投じ釣を擲つ。

修持操履して經書を讀誦し、乃至登臨して賞玩し、詠歌して舒嘯す。悉

く是れ大身の衆生を釣るの鈎餌ならんことを欲するなり。大身の衆生と

は、即ち大乘の根器是れなり。○宗師一切の施爲、未だ嘗て是れ人の

爲に向上に提持して、向上の人を接せずんばならず。但だ衆生根器下劣

の者、領悟すること能はず。而して彼れ舉心動念、悉く世相と作して之を解す、否らざる時は則

ち目けて禪道佛法と爲す、俱に塵勞を成す、皆是ならざるなり。○故に釋尊の曰く、「我が指を按ず

るが如きんば、海印光を發す、汝暫く舉心すれば、塵勞先づ起る」と。斯れ之の謂なり。○又の曰

●高庵。名は善悟、宋の洋州の人なり、佛眼清遠の法を嗣ぎ、南康軍の雲居寺に住す。
●大乘の根器。唯だ自悟するのみにあらず、無量の方便を解して廣く他を濟度せんとするものなり。
●釋尊曰。此の語は首楞嚴經に出づ。

く、「無上の覺道を求めず、小乗を愛念して、少を得て足れりと爲す。」疏に曰く、「無上の覺道は實所の如く、小乗の涅槃は化城の如し」と。○愚嘗て此れを覽て卷を掩ふて長歎せずといふこと莫し。此れ乃し大教の明文是の若し、奈何ぞ吾が門の上士と雖も、小乗を尙ぶ者、比比として之れ有り。抑又助道の事を以て、自ら究竟とする者有るをや。吁佛の道衰ふ、其れ茲に在る乎。○然れども佛又曰く、「我れ滅度の後、諸の菩薩及び阿羅漢に救して、應身して彼に生じ、末法の中、種種の形を作し、諸の輪轉を度せしむ。」或は沙門白衣の居士、人王宰官、童男童女、是の如く乃至姪女寡婦、奸偷屠販と作り、其れと事を同じうして佛乘を稱賛し、其の身心をして三摩地に入らしめ、終に自ら我れは眞の菩薩、眞の阿羅漢、佛の密因を泄すと言はず、軽く末學と言ふ。是の如くなるときは、則ち亦豈に此等即ち菩薩等の化身、逆行して順化することを知らんや。孰か其の非なりと曰はん。若し夫れ即ち此れ所謂履踐等の事を以て之を言はゞ、而も其れ豈に亦然らざらんや。○海印の事、釋者、大集經を以て云く、「閻浮の有らゆる色像、大海皆印文有り。佛如來・法身・性海、普く一切妙用の光を現するに喩ふ。」○教中に大母指の點、中指の中節を以て、之を海印三昧と謂ふ。理致を蕩滌し、美妙を銷鑠す。

①疏。宋の長水子瞻の義疏なり、實所は化城の譬は法華の化城喩品に出づ。
②大集經。具に大方等大集經といふ、六十卷あり、北涼の曇無讖の譯する所なり。

從上の佛祖聖賢の有らゆる所の言教及び一切因緣嘉好・甘美・微妙の處、是れ皆衆生の心病を療して、道體の良藥色香味を見ず。病去るときは則ち用無し矣。然して是の説を作す。亦乃ち初學を誘くのみ。若し其れ從上の先覺、眞正の提持、曷ぞ容く心意識を其の間に寄せんや。○又且つ人有るが如き、已に能く微妙殊勝の境界に至る者、誠に慶慰す可し。然も未だ道を見ざるのみ。○且つ大凡そ師匠萬種千般の方便爲人、或は一機を拈じ一境を示す、是れ皆眼東西を觀、意西北に在り。之に味き者、或は誤つて謂ふ、斯れは是れ附物・顯理・卽色・明心・理事融通し、色空無礙と。吁審なることは是の如き則んば、達磨の「一宗滅せん矣。○且つ佛の教法は華嚴より大なるは莫し、現量の境界・理事・全眞、初より假法無し。所以に一に卽して萬、萬を了じて一と爲す。一復た一、萬復た萬、浩然として窮り無し。心佛衆生の三つ差別なし、卷舒自在、無礙圓融なり。○圓悟和尚、張無盡に謂つて曰く、「此れ極則なりと雖も、終に是れ風無きに市市の波、此に到つて、祖師西來意と、是れ同か是れ別か」と。張無盡は乃し眞參實悟、禪教貫通し、深く宗門の奥に入る者なり。而も答へて曰く、「同」と。圓悟掌を撫して曰く、「且喜すらくは沒交涉」と。無盡、色を失す。圓悟の曰く、「見ずや、雲門

③圓悟和尚。名は克勤、字は佛果、宋の彭州の人なり、五祖法演に嗣法して成都府の昭覺寺に住す。圓悟禪師は蜀南に到りて張無盡に講して、華嚴の要旨を劇談せし時の語。載せて續傳燈錄第二十五に見ゆ。
④張無盡。字は天覺、名は商英、宋の新津の人なり。宰相となつて治蹟擧る、然れども思まれて貶せらる。禪法を兜率從悅に嗣げり。

の云く、「盡乾坤大地、絲毫の過患無きも、猶ほ是れ轉句、一色を見ざるも、始めて是れ半提、須らく知るべし全提の時節有ることを。」彼の徳山・臨濟、豈に全提に非ずや。無盡變然として手を以て額に加へて云く、「眞淨老師と雖も、亦是の如く審なるにあらず。」○是れ乃ち古今共に之を知る者、因つて理の一字を言つて、引いて此に至る。然も便に乗じて并せて一註と爲す。無盡の曰く、同と、及び失色と并に手を以て額に加ふといふ處と、乃ち是れ三枚の毒箭。然も箭は是れ暗箭、圓悟知らずして説議たるのみ。圓悟は則ち且く置く、請ふ無盡の爲に代つて之を別せよ。一に無盡、同と曰ふを須ひず、但だ再舉一偏せよ、看んと云ふ。二に色を失するを須ひず、但だ手を以て自ら其の口を擱せん。三に手を以て額に加ふることを須ひず、云云。但だ舌を吐いて之を示さん。○又圓覺に曰ふ、「一には理障、正知見を礙ふ。二には事障、諸の生死を續ぐ」と。○又石頭和尚の曰く、「事を執るは元是れ迷、理に契ふも亦悟に非ず」と。○愚謂く、「縦ひ理事をして涉らざらしむるも、尙ほ雲泥を隔つ。説は尼交の切。是の大猷を原ぬるに、初めの微笑に肇む。此れを推すに、宗猷より大なるは莫し。蓋し迦葉微笑の初めに因つて、而して此の日に至るなり。

●眞淨老師、兜率從悅の法の師眞淨克文なり、克文は黃龍懸南に嗣ぐ。
●箭。一本には「毒箭」に作る。
●圓覺。具には大方廣圓覺修多羅了義經といふ、一卷あり、唐の佛陀多羅譯す。
●石頭和尚。名は希遷、唐の端州高要の人なり、青原行思に嗣法し、南嶽に住す。

雙眸既に開いて、
迦葉の笑眼。

八絃 炳曜たり。赫たること晨曦に並び、喧嘩として久しく照す。紹續繼嗣、唱へ高く和邵し。

迦葉の祖、偈を前に作すこと既に高うして其の繼紹の子孫、之を後に和することも亦邵し。邵も亦高きなり、美なり。所謂「年彌々高くして、徳彌々邵し」といふ者は是れなり矣。

雍容たる能度、廊廡寢廟あり。

上の句は今の梵侶の威儀を言ふ、下の句は今の寺院殿宇の規則を言ふなり。寢廟とは前を廟といひ、後を寢と曰ふ。今の方丈と曰ふは、之を寢室と謂ふ、大なるを寢堂と曰ふ。室は則ち幽奥深遠、堂は乃し堂堂として明顯なり。今法堂は正に之を堂と謂ふ。佛殿を廟と曰ふ可し。○東土建寺の始めは、漢の明帝の白馬寺よりするなり。是の後朝代數々建立す、後魏に至つて大いに盛なり。世宗の朝、梵僧の至ること二百萬に餘る、寺院三萬餘所、塔廟の盛なること此れに出づること無し。自ら瑤光寺、永明寺を作るに至つて、胡太后、永寧寺、石窟寺を作る、悉く宮の側に在り、皆土木の美を極む。眞金の像、高さ丈八尺なる有り、又中人の如き者十軀、浮圖の九級を爲る、高さ九十丈、上に於て刹を立つ、復た高さ十丈、夜靜なる毎に、鈴鐸の音十餘里に聞ゆ。夫

●八絃。八方に同じ。
●法堂。演法の堂なり、帝釋天の法堂によつて名く。
●浮圖。塔をいひ、刹は塔上の柱をいふ。

の佛殿三門と高廣嚴麗の勝れたるとは、世に未だ有らず。僧房千間、珠玉綿綉、人の心目を駭す。魏より後、諸朝又其の幾といふことを知らず。○梁武の達磨に謂ふが如き、曰く、「朕即位以來、寺を造り經を寫し僧を度す、勝けて數ふ可からず。」凡そ今の寺、或は蕭寺と言ふ、説者の曰く、「蓋し寺は乃し蕭梁の造なり。」茲に概ね見つ可し。○然るに是の時亦未だ嘗て所謂五山十刹等の名有らず、但だ趙宋の末に始るのみ。時に明州の史氏、天下に相たるを以て之を爲る。又史相復た自ら墳寺を鼎建して大慈と曰ふ。重重の樓閣も、亦焉より偉なり。其の常住の産業を置くことの多きこと、人論じて以て之を明かにす。天童・育王・雪竇の二五山・十刹、總て其の三寺の物を計つて以て之を一にすとも、亦其の一大慈に及ばざるなり。而して又明より杭に至つて五百里に幾し。凡そ二十五里に並びに一接待を置く、皆以て建立畢く備はること、悉く大慈の如し。十方の住持に命じて、演法安衆、叢林の所と爲す。進退主職、悉く公舉に由る、一も己に私すること無し。今に至つて百數十載、其の制儼然として親目撃つ所、今の元朝、往往に新寺尤も多し。又毎州に於て、各一帝師の寺を建

●梁武。梁の高祖武帝は姓は蕭なるが故にいふなり。

●五山。支那の五山は杭州臨安府の徑山興聖萬壽寺、明州慶元府の阿育王山鄧華廣利寺、同じく太白山天童景德寺、杭州臨安府の北山景德報恩寺、同じく南山淨慈報恩光孝寺なり。

●十刹。杭州臨安府の中天竺山天寧萬壽永祚寺、湖州烏程縣の道場山護聖萬壽寺、建康上元府の蔣山太平興國寺、蘇州平江府の萬壽山報恩光孝寺、明州府元府の雪竇山資聖寺、温州永嘉縣の江心山龍翔寺、福州侯官縣の雪峯山崇聖寺、婺州金華縣の雲黃山寶林寺、蘇州平江府の虎丘山雲巖寺、台州天台縣の天台山國清教忠寺なり。

つ焉。

毛端刹境、

刹境とは即ち世界なり、一の日月、四天下に周行して、光明照す所、是れを二世界と爲す。○是の如き一千世界、之を小千と謂ふ。○是の如き一千小千世界、之を中千と謂ふ。○是の如き一千大千世界、之を大千と謂ふ。○是れを三千大千世界と爲す。即ち一大世界なり。一佛刹と名く。○世界の下、風輪の載する所、風の上は水なり、水の上、浮ぶるに大地を以てす。大地の正中に須彌山有り焉、又妙高と名く。道には崑崙と曰ふ、亦玉京と曰ふ。山の頂、四面峯有つて挺出す、曲臨して下に向ふ、峯の下、乃し三級有り。○下級は賢首天の住、中は持鬘天の住、上は常橋天の住と爲す。此の上に東西南北、日月星宿天、虚空の中に處す、猶ほ浮雲の如し、終に墮落せず。○山の四傍、上日月に鄰るの處。○四王天の住、又護國天王と名く。道には四聖と曰ふ、是れを東天蓬・南天猷・西翊聖・北玄武と謂ふなり。○此れ乃ち須彌の半腹のみ。此の四天王天の上、日月の明に超え、人間の頂に居す、切利天と曰ふ。四傍各々八天宮殿有り、及び中の一、三十三天と名く。○大智度論に云ふ、「昔婆羅門有り、摩伽と名く。姓は橋尸迦、福德大智慧有り、知友三十三人と共に福德を修す、命終に皆須彌山頂第二天上に生ず。三十三

●大智度論。百卷あり、龍樹菩薩の作にして、鳩摩羅什三蔵の譯なり、大般若經の釋論なり。

人を輔臣と爲す、摩伽婆羅門を天主と爲す、即ち帝釋なり。亦釋提桓因と曰ふ、又須彌山王と名く。道には玉皇と曰ふ、儒には昊天と曰ふ。又大毘婆沙論に云く、「或は鑠羯羅と名く。或は補爛達羅と名く。或は莫迦梵と名く。或は婆娑縛と名く。或は憍尸迦と名く。或は舍芝夫と名く。或は印達羅と名く。或は千眼と名く。或は三十三天尊と名く。」乃ち帝釋千名の謂有り。之れ即ち一世界の主なり。

又初利天の上に、夜摩・兜率・樂變化・他化自在あり。○如前の六天より下方の金剛水際に至つて、悉く欲界と爲す。○兜率陀、此には樂知定と云ふ。按ずるに、華嚴に乃ち諸佛菩薩再來して、設化度人の處、及び等覺の菩薩聖果、將に圓ならんとす、所住の天なり。其の上の色界、樂寂の心多し。而して下の諸天は、放逸に過ぎたり。惟だ此れは中を得たり。三界會中猶ほし輻湊するが如し。三界福惠、自在圓滿、清淨第一の天と爲す。上生經に云く、「菩提を長ぜんことを欲すと樂はん者は、此の天に來生す」と。今二三子、斯の文請ふが爲に作る。復た多衆と力を勤めて刊行せば、菩提の心在る有らん。又復た夫の後の凡そ覺んことを獲ん者と、亦豈に異ならんや。並に願はくは共に此の天に生ぜん。彼の諸佛菩薩の作に効はば、亦美からずや。稜嚴に云く、「乃至

①大毘婆沙論。二百卷あり、五百大阿羅漢等の遺、唐の玄奘譯す。

②等覺。別教の菩薩の五十二位の階級中第五十一位に居り、第十一品の無明を斷じて此の位に入るなり、之を一生成覺の位と受職灌頂の位と稱す。即ち佛果の候補者なり。

③上生經。佛說觀彌勒菩薩上生兜率陀天經といふ、一卷あり、劉宋の沮渠京聲の譯なり。

劫壞して三災及ばず。然も阿含、上に在り、後注に見えたり。欲界の上に於て、梵衆・梵輔・大梵王有り。○一切世間は、此の天の造る所、此れ即ち千世界の主なり。○斯の如き三つの者を初禪天と名く。

④火災の際。壞劫の時、初禪天を燒盡すれども、第二禪天に至らず、故に際といふなり。

初禪より上、小光・無量光・光音有り。○此の三勝流、乃ち二禪と曰ふ。○阿含に云く、「火災此に至つて際と爲す。」

二禪より以上、少淨・無量淨・遍淨有り。○此の三位是れを三禪と爲す。○阿含に云く、「水災此に至つて際と爲す。」○三禪の頂より、福生・福愛・廣果・無想あり。○右是の四類、其れを四禪と號す。○阿含に云く、「風災此に至つて際と爲す。」○四禪を逾えて向上に、無煩・無熱・善見・善現・色究竟有り。亦摩醯首羅と曰ふ、亦大自在天と曰ふ。此の天、謂言らく盡虛空界の一切衆生、皆我れより出づと。此れ即ち三千大千世界の主なり。○其れ茲の五級を不還天と名く、亦淨居と名く。○此れ乃ち色界、此に至つて極る。下の梵衆より是の十八天に至つて、總じて色界と名く。色界の上を越えて、復た無邊空處・無邊識處・無所有處・非想非非想處有り。○此の四空天を無色界と爲す。

毘婆沙論に、下方世界の無邊を説くが如き、此の中、上下の重累を以てせん。謂く、此の界の風輪

の下従り、虚空懸遠にして、下方色究竟天有り。彼の下、展轉して乃至風輪なり。次の下、復た色究竟天有り、展轉向下、乃至風輪なり。是の如く展轉して下方の世界、乃至無邊なり。○又此の色究竟の上より、虚空懸遠にして、上方の風輪あり。彼の上、展轉して、乃至色究竟天なり。次の上復た風輪有り、展轉向上、乃至色究竟天なり。是の如く展轉して上方世界、乃至無邊なり。○所謂世界、虚空の中に在つて、虚空無盡、世界も亦無盡なり。是の如きの外、八方上下、又各各無量阿僧祇世界、恒河沙數世界、盡虚空不可說數の世界有つて、窮盡す可からず。○華嚴蓮華藏世界品に説く所の如き、十方世界の多きこと、管に

●阿僧祇、大数の名にして無數と譯す。

細雨密霧の如きのみならず。○又圓覺に曰く、「恒河沙數の諸佛世界、猶ほし空華の亂起亂滅するが如し。」○大地既に空中に在り、乃ち震動の事有り。佛の言く、「其の縁八あり。地は水上に在り、水は風に止り、風は空に在り、空中の風大、時有つて自ら起る則は、大水擾る。水擾る則は動ず、是れ一つ。時に得道の比丘・比丘尼及び大神尊天有り。觀するに、水性は多く、地性は少し、自ら力を試みると欲するときは則ち動ず、是れ二つ。若しくは始め菩薩、兜率天從り神を母胎に降し、專念不亂にして而も動ず、是れ三つ。菩薩出胎、專念不亂にして而も動ず、是れ四つ。菩薩初め正覺を成じて而も動ず、是れ五つ。佛初め成道して、無上の法輪を轉ず。魔若しくは魔天・沙門・婆羅門、諸天世人、轉ずること能はざる所にして則ち動ず、是れ六つ。佛教將に畢らんとす、專念不亂に

て、性命を捨てんと欲するときは則ち動ず、是れ七つ。如來 無餘涅槃界に於て、^①般涅槃の時、大地震動す、是れを八つと爲す。

●磨斥して觀眺せしむ。

磨亦揮に作る。搗摩戲、並に吁爲の切、斥は音尺、手指赤指するを之を言ふなり。莊子に伯昏無人が曰く、「夫れ至人は上青天を窺ひ、下黃淵に潛む、八極を磨斥して、神氣變ぜず。」○此に謂ふこゝろは、迦葉の子孫を繼紹して、肅穆の體を具する、則ち廊廡寢廟の間に於て、陸堂入室・大坐、軒に當つて、無邊・塵毛・刹境の事を以て、指搗揭示し、人をして觀覽せしむ。然も李長者の云く、「無邊の刹境、自他毫端を隔てず、十世古今、始終常念を離れず、是れ則ち又奚ぞ須らく特地に爲す可けんや。」然れども是れ亦理なり。祖師西來意の方擬す可きに非ず。又夫の宗門極唱の若きんば、亦豈に是れを言はんや。方便門中の聊爾のみ。

●無餘涅槃。涅槃を證得したる上に、殘餘の苦果、即ち肉體をも滅盡したるをいふ。有餘涅槃に對す。
●般涅槃。般は善く究竟の意、涅槃は出離の意、變は煩惱結の意、故に煩惱結を善く究竟して出離するの意なり。即ち圓寂、入寂の意なり。
●莊子。此語は莊子の外篇田子方の篇に見ゆ、但し黃淵を「黃泉」に作り、磨斥を「揮斥」に作る。
●八極。八方の際涯なり、揮斥は縱放の意。

言喻及ぶこと罔し。此の事は言語譬喩を以て、能く及ぶ可きにあらず。如來一切の譬喩を以て、種種の事を説く、譬喩能く此の法を説くこと有ること無し。故を以て心智路絶え、不思議の故に、余何人ぞや、言喻能く

及ばん。
賢警誦ること母れ。謾に聞達の者、聊か自ら警めよ也。

國譯宗門千字文終

○
是の作は皆請ふ所に由つてなり。註を請ふ、始め千餘言を以て、其の語脈借貫の處を剖つのみ。人
太だ簡なるを以て、乃ち其の綱目を筆條する者有れば、口づから其の要節の者を指して、註を益さし
む。従つて増して若干に至る。藁草既に就る、又復た句點を爲らんことを請ふ、二三子之を争ふ。或
は曰ふ、點するに宜しからずと。或は曰ふ、點乃ち善ならんと。其の故を問ふ、宜しからずと謂ふ者
は、人の譏を致さんことを恐れてなり。善しと謂ふ者は、特に以て初學を利せんと欲してなり。斷を
請ふ。余が曰く、「是れ則ち其の己に利あらざるの譏を避けて、人を利する
こと無くんばある可からず。鄭の子産、丘賦を作る、國人之を誘る。子
産曰く、「何の害あらん、苟も社稷を利せば、死すとも生ずとも之を以てせ
ん。」然れども丘賦は誠に人を妨げて誘を致すこと有り。子産、社稷を利す
るの故を以て、其れを以て害と爲さず。況んや茲に點を託する所の空言に加ふるをや、唯だ我が勞の
み。抑能く人を利して、人を妨ぐる者無し、又且つ所謂自ら警むるなり、而も豈に人に示さんことを
欲せんや。今又諸子の請を以てす、益己が意より出づるに非ず。乃ち従つて以て請ふ、固に何の害
あらんや。衆の曰く「善し」と。是に於てか之を點じ、并に茲に注す。

鄭の子産。姓は公孫、名は僑、
鄭の大夫なり。その國に當る
の間は、晋楚の強さいへどし、
兵を加ふるを得ず。孔子その
徳を稱す。

前の第一紙より此の第十七葉に至つて、四衆の人名を除くの外、共に計るに萬單三百八十九

後紙の釋問第一葉、此れを聯ぬる則は十八紙と爲るなり。字數後に在り。

釋問

宗門千字文、繕書既に畢る。二三子、再び趨つて問ふこと有り、釋問を作れ」と。

○問うて曰く、「一切の所作、皆由緒有り、辱くも千字文を和す。旨は即ち偈頌なり。然して偈頌の作、道を談ずと知ると雖も、癡始の根源、實に未だ悉にすること能はず、重ねて願はくは慈悲、我が寡聞を釋したまへ」と。

曰く、「本は佛祖なり。諸經の偈、七佛の偈、諸祖付法の偈の如き是れなり矣。梵語に二有り。一には伽陀、此に諷頌と云ふ、亦不頌と云ふ。謂はゆる長行を頌せざる故に。或は直頌と名く、謂はゆる直に偈を以て法を説く故に。二には祇夜、此には應頌と云ふ、謂はゆる長行を頌すればなり。古德嘗て之を論ず。或は鈍根の爲に重ねて説く、或は後來の徒の爲にし、或は前説を増明せんが爲なりと謂ふ。余が謂く、其れ猶ほ東土の詩賦・歌頌等の文詞の如きのみと。偈は言詞なり。經の偈は則ち曰く、偈を説いて言

①長行。十二部經の一にして、散文をいふ、その義理に隨つて長短あり、字數を以て拘束せられざるなり。

く、文詞に則ち云く、而も詞を爲つて曰くと。詩賦等の作、或は先づ序して後、詞を爲る者あり。或は序せずして、竟に詞を爲る者あり。序は則ち律調音韻を以てせず、唯だ其の事を散述する者、猶ほ

長行のごとし。然れども音韻無きにも非ず、「風水上に行き、風空中に鳴く」といふが如き、但だ拘拘たらざるのみ。詞は則即ち詩等、必ず律調音韻を以てする者は、猶ほ偈頌のごとし。詩は志の之く所の謂なり。然れども詩は諷刺嘲詠に過ぐる事無きのみ。且つ曰ふ、天地を動じ、鬼神を感ぜしむと。宗門の偈頌は、唯だ是れ佛祖の大事を發明して、佛祖の知見に達するものに非ずんば、孰か能く之を爲ん。頌は誦なり、稱述なり、盛徳の形容を美して、盛徳を歌誦するなり。謂ふころは、偈を以て其の事を稱頌し、以て其の徳を美むるを言ふなり。所謂徳業を游揚し、成功を褒讃すといふ是れなり矣。而して佛菩薩、正に宣揚の時に當つて、皆寶音梵唄を以て、演べて微妙清雅の韻と爲す、悠揚諷咏、優遊彬蔚、婉として章を成し、乃ち不盡深長の意を涵して人をして樂聞せしむ。今茲の翻譯、能く之を寫すこと莫し、唯だ其の大意を撮るのみ。此の故に經偈は、亦押韻を有すること無し。東土の諸祖、始めて稍之を體す、是れ皆悟明通達、口を衝いて而して成る。造作を假るに非ず、法の滋ふこと既に久しうして、華竺兩ながら狎る。人心轉巧にして、機變迭に出づ、遂に諷を風雅の音に寄せ、西來不轉にして傳ふるの意を播揚す。且つ前に所謂、詩は六義に止るのみ。宗門の玄唱は則ち嚴若として六義を含む者有り。⑥六義の表に超然たることあり、而して絶た世間翰墨畦逕の外に去つて、來ること

⑥六義。詩の六義は風、雅、頌、賦、比、興の六なり。風は下化し、上戒むるの詞なり。雅とは王政の興廢を言ふ。頌は盛徳を美し、成功を神明に告ぐる詞なり。賦は其の事を直叙し、比は例を引いて言ひ、興は物に託して詠するものなり。

蹤を知らず、去ることも迹を知らず。意の求む可きに非ず、情の能く測るに非ず。若し或は其の翻ずる所の經偈の作を體する則は、之に逼似す。唯だ其れ達人は千變萬化す。所謂青は藍より出で、氷は水より寒くして、而して聲響を成すもの歟。古より今に至るまで代賢に乏しからず。然れども近今と雖も、而も能く前作に超ゆる者、時亦之れ有り、第だ多からざるのみ。又頌古の作有り、之を儒家に譬ふれば、則ち猶ほ詠史のごとし、復た幾んど數百載なり矣。蓋し宋國の初め、汾陽に始る、是の時尊宿、皆悉く渾厚蘊藉にして、浮靡を尙ばず。天禧の間、雪竇、辨博の才を以て、其の音を恢宏にし、卷舒抑揚、縱横妙を得るにあらざといふこと莫し。後の作者、其の右に出づること莫し。然れども亦其の美意變弄を以て、新を求め巧を琢き、其の宗風を變じ、古淳全の作を失すること有り矣。景定・咸淳の間に至つて、所謂大道衰へ、變風變雅の作あり、是に於て雕蟲篆刻して之を競ふ。晚唐の詩人、小巧聲韻に倣効す。思惟煉磨して、二十八字を成して、道號の頌と曰ふ、時輩相尙んで、今に迫んで遏むこと莫し。中に於て深く其の非を知つて、深く絶ち去らんと欲する者有りと雖も、然れども久弊を以て、頓に除くこと能はず、勉めて其の時に隨ひ、曲げて其の機に就く、亦復た來命を拒まず。時に或は筆を乗り、靚面に手に信せて賦して需むる所を塞ぐ。聊か方便接引の意と爲すなり。然して其の音律諧和すると、夫の事理の句意、俱に到つて活脫なる者とを以て、或は之を

⑥雪竇。名は重顯、宋の遂寧府の人なり。雲門宗の智門光祚に嗣法し、明州の雪竇山に住す、明覺大師と諡す。

哦せしむ。誠に亦人に可なり。然れども譬へば蜜を食つて中邊皆話きが如し、宜なるかな、人其の之を愛することを。若し夫れ飢餓を濟はんと欲せば、得べからざるなり。」

○問ふ、「詩等の律調音韻、得て聞く可き乎。」

曰く、「此れ特に文人才士の習氣のみ、奚ぞ必ずしも泥まんや。且つ詩人も亦言へること有り、曰く、書を論ずることは形の似たるを以てす、見兒童と鄰し、詩を作つて必ず詩に比す、定んで詩を知る人に非ずと。此れ乃ち東坡先生の語なり。遠れる哉斯の言、況んや宗門をや。抑詩は余が業に非ず、詎ぞ能く之を言はん。律調は常に聞く、黃帝、伶倫をして大夏の西、崑崙の陰より竹を嶰谷に取り、其の厚薄均しき者を生ずるを、兩節の間を斷つて、十二箏を制す。黃鐘の宮を吹いて、以て鳳鳴を聴く、其の雄鳴六となす、雌鳴も亦六なり。陽六を律となし、陰六を呂と爲す。六律六呂、總べて之を十二律と謂ふ、以て十二月の音氣を述ぶ。律とは一に黃鐘と曰ふ、十一月。二に大簇と曰ふ、正月。三に姑洗、三月。四に蕤賓、五月。五に夷則、七月。六に無射、九月。已上を陽律と爲す。呂とは一に林鐘と曰ふ、六月。二に南呂と曰ふ、八月。三に應鐘、十月。四に大呂、十二月。五に夾鐘、二月。六に仲呂、四月。已上を陰呂と爲す。調とは其の律呂、喉齒牙舌唇の五音を合和するを以て、雅韻を成す。之を歌詩に作り、絃樂に被らしむ。故に舜、夔に命

●習氣。煩惱の餘習をいふ。
●東坡。姓は蘇、名は軾、字は子瞻、東坡はその號なり。宋の眉山の人。支那一流の文豪なり、卒して文忠と諡す。禪法を照覺常總に嗣げり。

じて樂を典らしむ。曰く、詩は志を言ひ、歌は言を永らす、聲は永に依り、律は聲を和ぐるなりと。且つ韻の一字、韻度の韻有り、音韻を押す所の韻有り、前に謂ふ所の經偈韻無しとは、押韻無きを謂ふなり。倘し之れ有るは唯だ譯人の弄巧のみ、豈に竺土音韻同じからんや。然して且く古詩の押韻、亦乃ち或は有り或は無き者之れ有り、略髣髴として音聲相近き者を以てすること之れ有り、其の功之に諸ふ者は、固に言に在らず矣。帝庸作歌・五子の歌の如き、周詩三百關雎首篇の五章に至りて、即ち見つ可し。此れ乃ち詩の源本は、之を心に得て、之を口に應ず、自然の吐く所、風の水を吹くが如し、散漫動蕩、天然紋を成す。故に易に曰く、風水上行いて渙たりと。是れを以て之を觀れば、豈に苦思安排を假つて之を成せんや。後の作者、前人に摸倣するに過ぐる無きのみ。然も亦至る有り、至らざる有り焉。漢の蘇李に至つて、始めて五言の詩を爲る、亦是れ混然たる天成、絶して痕迹無し。此れより而降、猶ほ百川競ひ注いで、其の流多きがごとし矣。更に體制を變ずると亦一ならざるなり。齊梁の間、乃ち平頭上尾、蜂腰鶴膝、大韻小韻、旁紐正紐の制有り。唐に至つて詩大いに盛んなりと爲す、唯だ李杜獨り古今に冠たり、李聖杜史と謂ふ。是の後、韓柳、文を以て冠たり、詩も亦其の下に出でず。或は韻寛きを得る則は、旁韻に泛出す。乍ち離れ乍ち合ふ、縱横馳逐す。或は韻窄きを得て、復た他に叶はざれば、以て其の奇能を顯す。此れ皆古體なり。又今體有り、格法其の幾といふことを知る事莫し。唐の鄭谷と齊己等との如し。

●鄭谷。字は守愚、宜春の人なり、詩を善くす。齊己、早梅

定る所の者、葫蘆の韻、輓轡の韻、進退の韻有り、又雙聲疊韻有り。音聲對法に至つて、瑣碎萬千なり。然も所謂詩は、賦・頌・銘・贊・文・誄・箴・詩・行・說・吟・題・怨・歎・章・篇・操・引・謠・謳・歌・曲・詞、悉く之を詩と謂ふ。宗門の偈頌は、乃し物外の談、聊か協ふに韻を以てすと雖も、唯だ臨時の變化に在り、豈に此れを論ぜんや。若し夫れ規々として求むるに、瑣屑の體制を以てすることは、即ち是れ世間蹤跡の言、豈に達道の者ならんや。箴亦族に作る、並に千候の切、射は音亦、永は音詠。

○問ふ、「何をか平頭上尾、蜂腰鶴膝等の制と謂ふ。」

曰く、「平頭とは第一・第二の字、第六第七の字と同聲なることを得ず。『今日良宴會、觀樂具に陳べ難し』といふが如き、今觀は皆平聲、日・樂は皆入聲なり。上尾とは第五の字、第十の字と同聲なる可からず。『青々たり河畔の草、鬱々たり園中の柳』といふが如き、草・柳は皆上聲なり。蜂腰とは第二の字、第五の字と同聲なることを得ず。『聞く君靚妝を愛すと、切に自ら修飾せんと欲す』といふが如きなり。君・粧は皆平聲、欲・飾は皆入聲なり。鶴膝とは第五の字、第九の字と同聲なることを得ず。『客遠方より來つて、我れに一書札を遺る』といふが如き、上には長く相思ふことを言ひ、下には久しく離別すと言ふ。來・書の二字、皆平聲なり。大韻とは聲鳴等の字を用ひて韻と爲るが如し。上の九字、

の詩を撰へて詣る。谷その「數枝開」を改めて「一枝開」に作る、已覺文字拜して一字の師となす。
○齊已。五代の高僧なり、益陽の人、梁の江陵府の龍興寺に住す、詩を善くするを以て名あり、白蓮集の著あり。

驚傾平等の字を用ふることを得ず。小韻とは本韻一字を除いて、外九字の内、兩字同韻なることを得ず、遙條、句を同じうせざるが如きなり。旁紐・正紐とは、十字の内の兩字、雙聲なるを正紐と爲す、若し共に一字にして、雙聲有るを旁紐と爲す。流六を正紐と爲し、流柳を旁紐と爲るが如し。『靚音は清、札は側八の切、紐は女九の切。』

○問ふ、「葫蘆等の韻、又何と謂ふことぞや。」

曰く、「葫蘆とは前三後四、前の三韻、同一韻を以てす。第四韻は則ち他叶なり。又之を漏底格と謂ふ、又跳珠韻と曰ふ。輓轡とは雙出雙入、前の二韻、同一韻を以て、後の二韻、他叶同一韻。進退とは一進一退なり、即ち一出一入、又出入の韻と名く。雙聲とは此には對法と言ふ、黃槐・綠柳の如き、又『秋露佳菊に香ふ、春風麗蘭に馥し』といふが如き是れなり。疊韻とは彷彿・放曠の如し。又『放蕩たり千般の意、遷延たり一片の心』といふが如き是れなり。雙聲疊韻の如き者は甚だ多し。試に再び一二を擧ぐ、『幾家か村草の裡、吹唱江を隔てて聞く』といふが如き、此の二句、裡・聞の二字を除いて、餘の八字は、乃ち四ヶ雙聲なり。『月影簪を侵して冷し、江光履に逼つて清し』といふが如き、此れ疊句なり。又『蝶蝶東に在り、鴛鴦梁に在り』といふは雙聲なり。又梁の武帝の云ふ、『後牖朽柳有り。』劉孝綽が云ふ、『梁王長く康からしむ。』強ひて又是れ雙聲、又疊韻なり。『鴛鴦は於衰の切、鴛鴦は於良の切。』

○劉孝綽。南北朝時代の人、梁の武帝、齊の武帝に仕ふ、詩文に善し、文集あり。

○問ふ、「竊に聞く、説法にも亦復た諸の體裁有りとは、是なりや否や。」

曰く、「世間萬事、何ぞ一として體裁無からんや。然も若し夫れ唯だ體裁のみを守る者は、是れ亦言ふに足らざる者なり。參到學到、機熟し心通じて、然る後陳腐を絶去し、繩墨を超脱し、縱横卷舒、妙に天然に出づ、豈に世の規矩、以て方圓を定むることくならんや。然して名目既に多し、臨時の應變、用つて隨宜に在り、施して可ならずといふことなし。」

○問ふ、「名目の多きとは何ぞや。」

曰く、「居常の説法、今の所謂 上堂といふものの如き、是れ一なり。或は種種の事に因る者、或は時節に遇ふ者、或は名徳の尊宿、他寺に至り、彼にて 陞座を請ふ者、或は檀那の請にて、或は陞座、或は 小參、或は 普説、并に諸の 凶吉坐立、大小の佛事、及び頭首 乘拂、諸等の佛事なり。」

○問ふ、「名徳の尊宿、他寺に至つて陞座。嘗て聞く、叢林の商量、須らく主賓を具すべしと、而して便ち拄杖を拈すべからざる等の事有り。之の説如何。」

曰く、「講説之れ有り、然も取る可き有り、取る可からざる有り。若し便ち拄杖を拈すべからずと曰

①上堂。法堂須彌壇上に登つて宗乘を參問せしむる式なり。

②陞座。法座上に昇つて宗乘を參問せしめ、又は説法するなり。

③小參。臨時に小集して參問せしむる式なり、上堂の單簡なるものなり。上堂を又大參ともいふ。

④普説。陞座の一方法にして、廣く説法講話するなり。

⑤乘拂。副法者が行ふ最初の參問式なり。

はば、之を不知賓主者と謂ふ。此れ誠に俗談取るに足らざるなり。何となれば則ち且つ尋常の納僧、或は專使と爲つて、持書送信、或は來り參ずることを得、或は偶爾の經過、或は常に座下に居し、或は驀忽として相逢ふ。作家の相見、縱横逆順、賓主歴然、觀瞻の者、眄目に暇あらず、唯だ箇の中の人、方に能く點首せんのみ。而も況んや名徳尊宿の過訪、主人大法の爲の故に先づ爲に座に引き、謙恭して謝を叙べ、尊慈を拜屈す。誠を盡して委託し、矜しくして未聞を聴く。唯だ固辭を恐れて承命を肯はず、主既に慇懃なれば、賓當に請を受くべし。實座一たび登るときは、則ち我れ法王と爲つて、法に於て自在なり。彼此情を忘れて、互に相酬唱す、同じく法幢を建つ、何ぞ小節に拘はらん。抑且つ詞命に善き者は、著著超方、頭頭回合ならずといふこと莫し。豈に世の柱に膠して、弦を調ぶるの論にして、而も擬す可けんや。」

○問ふ、「復た聞く、頭首乘拂、宜しく主賓を具すべし、其の禮猶ほ甚だしと、是なりや否や。」

曰く、「此れ則ち言に在らずして、而も知んぬ可し。何ぞや。若し名徳尊宿を以て、之を頭首に視へば、猶ほ霄壤のごとし。且つ凡そ其の座下に居りて、一人を主と爲し、多人を伴と爲す、悉く皆之を參學と謂ふ。唯だ前堂の一職、或は是れ已に曾て出世の名徳、西堂なる者は、則ち又殊別なり。名けて分座説法と曰ふ、之を平分風月と謂ふ。其れ少自在を得るに庶幾からんか。然らば賓は則ち始

⑥西堂。他山の退院の人を賓客として居らしむる所なり。西は賓位なり、今一種の位次となる。

終賓、主は則ち始終主、主賓禮有り、上和下睦じ、且つ禮者亦人の大論、其れ諸れを忽にすべけんや。其の次の頭首、寶座に高く降る、茲に由つて初めに歩す、舉心威儀、悉く宜しく恭謹なるべし。而も況んや主賓其れ存せざるをや。或は主なりと雖も、寛仁大度、瑣瑣の規を以て、其の下を責めざれ。然も多衆旁觀、識者焉れを晒はん。」

○問ふ、「今の乗拂・問答・提綱・叙謝等の事、眞を失すること甚だし、一として法とすべきなし。其の久久循習して、弊を成すを以て、之を牽けども返ること莫し。第だ恐らくは後昆を悞累し、先哲を玷辱し、訛を以て訛を傳へ、綿綿として絶えず、深く害をなすことを。願はくは師腕力を惜まず、其の非を筆條して、淪溺を拯濟せよ。以て如何とか爲す。」

曰く、「不可なり、何ぞや、水潦鶴の流既に衆し。阿難者己の嘲り、況んや已に衆し矣。而して又豈に特り乗拂の一事のみならんや。抑賢者の所爲に非ず、又安んぞ能く其の非を以て、吾が臆らざるの筆端に寄せんや。叢林日に凋喪に就き、宗祖の宏綱、之に随つて頽委することを痛むと雖も、豈に言ふこと無さを忍ばんや。然も近今を觀るに、數賢達有つて大方に遊歴す、博く前古を攷へ、智眼既に明かなり。覆轍に墮せず、天然超詣す、光を觀る可きに足れり、是れを有道の者と爲すなり。是に於て才智の士、日に正に就いて焉、一も瑕類無し。唯だ餘の朽腐は、無知にして自ら罔罔と爲つて、之を思はざるのみ、固に何の害あらんや。抑又當今、俊人迭に出でて、天資益勝れたり、業内外に精

しく、思天淵に出づ。西來の墜緒、悉く能く披究して、不日の間、當に百川を障へて東せしめ、狂瀾を既に倒れたるに回すことを見る可し。吾れと子と固に憂なし矣。然も且つ將來をして此の俗惡を聞かしむること毋れ。是を以ての故に固に不可なり。所謂提綱の一事、昨に曉仁、藏主の間はるるに因つて、一時の間、聊か會て批答す。益茲に有り、復た重舉せざれ。」

○問ふ、「百丈・龜鏡・衆僧を開示す、故に長老有り、今多くは爾らざるは何ぞや。」

曰く、「大法輪を轉し、洪惠命を延べ、後學を接引し、人天を開鑿するは、長老の職なり。然も必ず其の唇を搖し、舌を鼓し、古を學し今に明かなるを以て、始めて開示を爲さんと欲せば、則ち亦劍去つて久し矣。波瀾を以て、便ち通達と謂ふこと勿れ、未だ拙訥すべからず、即ち愚癡と曰ふ。黄檗の曰く、「牛頭の横説堅説、未だ向上の關板子有ることを知らず。余初意に謂らく、其の抑揚なりと。洎と牛頭録を閲するに、豈に抑揚せんや。其の一端、夫の天下宗師の若き、各有各の用處各同じからず。魯祖面壁、秘魔拳又、是の若きの者、千差交横ふ、指を倒して及ぶ莫し。五家宗主の如きに至つて、臨濟の用は、則ち青天の霹靂、陸地の波濤、白拈の手段を用ひて、殺活自由。雲門は則ち衆流を截斷して、擬議を容れず、顧鑒

- 藏主。經藏を主管する役名なり。
- 長老。沙門の道高く長長するものを敬稱す。
- 黄檗。沓運禪師なり。
- 牛頭。牛頭法藏禪師なり。
- 魯祖。法磨大師をいふ、魯は支那を稱するなり、法磨大師は支那禪宗の祖師なるが故にいふ。
- 秘魔。五臺山の秘魔巖和尚は荊州永泰寺の靈滿禪師の法嗣にして、南嶽下第三世なり。常に一木叉を持ち、僧の來り

の間、東涌西沒。曹洞は則ち君臣道合、偏正回互、金針玉線、體用雙全。瀉仰は暗機義海、父慈子孝、險崖の句を具し、陷虎の機を用ふ。法眼は句外投機、箭鋒相拄ふ。句意俱に合し、物に即いて神に契ふ、梗概此の如し。若し其れ沛乎浩若たること、長江大河、深溪巨壑の如き、中に於て含洪吐吞、萬狀惶惑す。而して又曷ぞ勝けて言ふ可けんや。至若古今尊宿の言詞、一一の作用殊別なり、淺深未だ彈く擧し易からず。且つ如今の五燈に載する處の古德先賢、悉く是れ大善知識にあらずといふこと莫し。收むる所の機縁語句、皆向上の提持を謂はずといふこと莫し。然も中間に於て水乳無さにあらず、其の披覽の時に當つて、若し擇法の眼を具せずんば、未だ分別是非すること能はじ。既に分つこと能はずんば即ち是れ波に隨ふ。自ら混じて源を見、源を見て既に混ず、彼を開示すと雖も、了に能く識ること莫し。子等が如き精緻人に過ぐることも有るも、能く幾何ぞや。子等が所問、其の志の在る有り、且つ三寸の舌有つて、說法すること能はざる者を嗔羊僧と名く。況んや其の職をや。然るに宗通說通、卷舒自在、建立掃除、演說單提、萬種千般、旁午機に對し、常陽準有り、想已

て禮拜するを見る毎に、仰ち頭を叉却して云く「那箇の冤魅か汝をして出家せしむ。那箇の冤魅か汝をして行脚せしむ。道ひ得るも也た又下に死せん、道ひ得ざるも也た又下に死せん。速に道へ」と。僧對ふるものあること鮮し。
⑤五燈。景德傳燈錄は僧道原の作、廣燈錄は李遵勗の撰、續燈錄は佛國法雲惟白の撰、聯燈要は淨慧晦翁悟明の撰、普燈錄は雷庵正受の撰なり。此の五燈を會要して五燈會元を撰し、明の費隱通容、五家の宗統を正して、五燈嚴統を撰す。
⑥德山。唐の朗州德山の宣鑿なり、師は尋常僧の到參に遇へば、多く拄杖を以て打つ。
⑦臨濟。臨濟義玄は多く喝を下し、又四喝の話あり。

に洞達なり。豈に未至を以てし、及び未知を以てし、并に以て妄に傳へんや。他時後日、妄に來學に酬いば、後昆を聲替せん、宜しく詞を慎むべし。○問ふ、「又知識有り、言語の人を開示すること有ること無く、唯だ一棒、一喝を以てすること如何。」

曰く、「是れ其の所得三昧なり。然れども若し眞正の擧揚を論ぜば、此れ猶ほ假借のごとし。若し全體作用を論ぜば、此れただ輕微なり。然も其れは乃ち是れ 德山 臨濟の作、孰か欽まさらんや。然らば則ち第だ恐る、後來太だ多からんのみ。且つ臨濟德山は、唯だ棒と喝とのみならんや。」
○問ふ、「行化倒脱、坐脫立亡の者如何。」

曰く、「助道の法なり、若し夫れ中下の流を起して敬信を生ぜしめんと欲せば、此れに出づること無し。世俗之を臨終に大自在を得て以て常人平生の行履を驗むと謂ふ。而も又此の希罕奇特の事有れば、誠に人を服す可し。然らば則ち若し其れ大法明めずんば、縱ひ能く 十八變を現じ、金棺自ら擧り、化火自ら焚くに至るとも、亦徒然なり。今夫の中下の流、是れ有る者を見て、頭を叩き心を傾けて、而して之を尊仰せずといふこと莫し。

⑧十八變。十八變は一、右脇より水を出す。二、左脇より水を出す。三、左に水を出す。四、右に水を出す。五、身上より水を出す。六、身下より火を出す。七、身上より火を出す。八、身下より水を出す。九、水を履むこと地の如し。十、地を履むこと水の如し。十一、虚空より没して復地に現す。十二、地より没して空中に現す。十三、空に住す。十四、空に行く。十五、空に座す。十六、空に臥す。十七、大身を現す。十八、小身を現す。之れなり。法華に見ゆ。以下釋迦牟尼佛、滅のまきの神變なり。
⑨寂音尊者。宋の覺範慧洪なり、寂音尊者の號は自ら稱する所なり。禪林僧寶傳三十卷及び林間錄等の著あり。
⑩瑞州先師。宋の温州瑞鹿寺

若し古徳に於て、或は臨終自ら怖怖を作し、及び其の種々人の欲する所に非ざるの状有り。所有の言句に至つて、亦其の人にして能く測る者に非ず。傳録に載すと雖も、之を覽る、覽る者目眩かし口呿るとも、十萬八千、謂ふこと勿れ、中下と、上智の果位中の人にも、亦之れ有り。寂音尊者、僧寶傳を作る、瑞鹿の先禪師に至つて、我れも也た弄不出の語有り、則ち其の贊詞の中に於て、洞山を并せて擧す。曰く、「吾が閑名已に謝す。臨濟曰く、『誰か知る吾が正法眼藏、者の瞎驢邊に向つて滅す。』寂音此の三語を以て曰く、『予毎に怪む、前聖平日の機辨、皆犯す可からず。臨終の日に至つて、皆光を弭めて氣を混す。』寂音の言、此の如し。又其の後に於て、復た之を嘆じて曰く、『其れ旨要有るか』と。愚管て此れを覽て、覺えず失笑す、子其れ之を勉めよ。又所謂行化倒蛻等の事、而も又豈に止だ是れのみならんや。達磨の隻履、普化の空棺、諸の希有の事の如き、世の有識大達明眼の者に乏し。一等の人、妄に謂ふ、達磨は胎息を以て人に傳ふと。之を法を傳へて迷情を救ふと謂ふ。遂に渾身脱去するに至つて、之を形神俱に妙なりと謂ふ。人間厚く此れを愛する者、則ち臨終の悻

の本先師にして、温州永嘉の人なり、天台徳祖の法を嗣ぐ。我れ弄不出の語は垂終問答の語なり、景德傳燈録第二十六に見ゆ。

洞山。良价は唐の筠州洞山に住す、將に圓寂せんし、衆に謂つて曰く、「吾れ閑名の世に在るあり、誰か吾が爲に除き得ん。」衆皆對なし、時に沙彌出でて曰く、「請ふ和尚法號。」師曰く、「吾が閑名已に謝す。」と。同上第十五に見ゆ。

達磨。大師示寂の後、已に葬る。のち塚を啓いて見るに、唯だ空棺に一隻の草履のみ存すといふ。

普化。鎮州の普化和尚は、臨終自ら棺に入つて行人をして釘たしむ。時に市人往いて棺を開くに、全身脱去して、唯だ空中に鈴の響きの隱隱として去るを聞くのみなりきといふ。

惶を懼れて、競妄して之を習ふ。以て日月を卜し、樓鼓を聴き、玉池を驗み、眼光を規ふに至つて、以て生死を脱するの法と爲す。閻閻を誑説して、高人の笑を貽す。此れ乃ち圓悟和尚、深く其の非を斥けること大略此の如し。詳かに必要に著す。其の下卷第五十九紙に在つて、檢閲を惜むこと毋れ。然らば則ち若しくは自家の心孔を以て、一たび開けば亦言に在らざるのみ。否らざれば則ち其の他人、紙上の語を閲して、千編を過すと雖も、復た何の益あらんや。」

○問ふ、「助道の法、其の數幾有り、而して又師の助くる所の者も、亦是れを以てする乎。」

曰く、「呼其の道有る者は、或は以て之を助く。是れ吾が道に於て尙ほ有ること無し、助何を庸ひんや。之を思へ。又其の數とは、教に言ふ所の如きんば、而も三十七品有り、愚を以て之を見れば、止だ此れのみならず。」

ふ。

三十七の助道品。四念處、四正勤、四如意、五根、五力、七覺支なり。詳に俱舍論第二十五に見ゆ。

釋問終

跋

竺仙梵和尚の宗門千字文は、予未だ古板を閱せず。屬者適書本を得たり。刀刁魯魚の訛謬あるを知らずと雖も、然れども此の書の泯滅して、將來に傳はらざらんことを恐る。幸に書林氏の請ふに依つて、病間に一覽して、和訓を加へて以て梓に鋳めしむ。庶幾はくは具眼の者、之を改削せよ。慧日峯下の天得禪庵に贅す。

時慶安四辛卯の曆純陽の吉辰

●慧日峯。京都東福寺のことなり、山號を慧日山といふ。

宗門千字文并序註

四明竺仙 梵 僊 撰

宗門中事、非文字語言能到、而文字語言未嘗不到、是故諸彦請次先儒千字文韵、以道宗門中事、不得却也。始余質之曰、愚之無文、未論、然特欲以是文爲何也、曰、觀夫凡今儒家者流、初學蒙童、習誦書寫、莫不以是先之、以其不煩而不簡、字無重疊、理頗淵奧、然後宏博、由是而興、吾宗無之、尤爲恨也、是亦方便接引、最善之一端、古所未有、亦豈非師之志乎、余聆其言、不以不才爲辭而成之、既而復請自註、余曰、斯則無是理也、抑文字語言標指也、而標指之外、復加標指、不亦迂之甚乎、且凡註者事而已、是則誠不可以己爲也、倘以意、則顧此譚薄、讀音窮淺也、李斯傳、能薄材講、奚足注爲、且嘗亦少竊觀世之所作、有雋永雋徂、究切、翻通、論戰、國說、士權變、亦自序其說、號曰雋永、師古曰、肥肉也、永長也、言所論甘美而深長也、無窮之趣者、及其其釋、則了無氣味、而餘韵遺度、截然而喪之、俱盡、則返使其文、不啻如糟粕也、今人以此爲太息者多矣、況此固陋、不足言者、然且亦有不可以指之處、或強少加之、中人以下、不能以意逆之、而自尼之、則如之何、曰、前不云乎、初學耳、蒙童耳、久則其不自能明耶、於是乎并從其以梗概云、己卯五月、書于淨智東堂。

宗門千字文

天地玄黃、法道遐荒。

遐者遠也、荒亦遠也、極遠之外、人跡不到之處曰荒、故八表亦曰八荒、蓋此法道、抱括天地、充塞萬類、靡所不被、而眇滢希夷、絕於視聽、幽致虛玄、非情能測、故曰遐荒、蒼生出沒、佛祖施張。

蒼生在於此道之中、生死出沒、而不自覺、是故佛祖出以覺之。

思惟演說、昭著含藏、剖析空有。

析音錫分也、佛初成道、於三七日、思惟是事、乃往仙苑及諸住處、十二年間、說諸有爲法、緣生無我、然猶未說法、無我理、名初時教、即阿含等一藏、小乘經是矣。○次依諸偏計所執、說諸法空、然乃依他圓成、猶未說有名爲空教。○次說法相大乘、境空心有、名中道教、即深密等經是矣。○次開示一切衆生、如來知見、會三乘爲一乘、會權歸實、名同歸教、即法華經是矣、臨入涅槃、說一切衆生、乃至闡提、皆有佛性、凡是有心、定當作佛、常樂我淨、名常教、即大涅槃經是矣。○然經教在於天竺、未至東土者有之、隱於龍宮、未擅闡浮者有之。○何則、昔涅槃後品未至、道生法師以天縱妙悟、精加研究、曰、闡提之人、自當成佛、此經來未盡耳、於是文字之師、不知自迷、而反攻之以爲邪說、於律當擯、生白衆誓曰、若我所說、不合經義、願

我此身即見惡報，若乃實契佛心，願捨壽時，據師子座，由是南來，虎丘，豎石爲聽徒，自講斯經，至闡提有佛性處，曰：如我所說，契佛心否？群石皆爲肯首，後遊匡山，聞曇無讖再返西竺，訪求足品，譯出，謂闡提皆有佛性，生乃忻然入寂，如誓。○又首楞嚴經，昔有西竺異僧，謂天台智者大師曰：龍勝菩薩，嘗於灌頂部，誦出此經十卷，流布五天，皆諸經未聞之義，唯心法大旨也。五天世主，保護秘藏，不妄傳授，智者聞之，日夕西向，遙禮願早東來，續佛壽命，然竟不及見，越百載，至唐神龍初，此經方至。○又華嚴經，佛滅六百載後，乃有龍樹，入於龍宮，閱之，凡有三本。○上本十三，三千大千世界微塵數偈，一四，天下微塵數品。○中本四十九萬八千八百偈，一千二百品。○下本十萬偈，四十八品，龍樹以前二本，非世所堪，但乃誦出下本，以流傳耳，且今止有三十九品，而餘九品未至於東土也。包括陰陽。

孔子以一陰一陽之謂道，斯則以道能包乎陰陽，非唯能包，嘗謂充塞萬類，而豈唯陰陽云道而已哉？道也者，何無之稱也，無不通也，無不由也，猶如虛空，無所不被。○今夫人於天地之間，能弘道者，譬如有人墜於坎井，土石崩覆，唯見壅塞，悶絕已矣，此猶墮於三界之中，不知其道，虛生浪死者也，然有雖墜或爲墜人而入者，則了知外空，土石可穴，力穴而出，穴及一尺，乃有尺空，非見空入，多尺亦然，既出坎井，見無邊空，非有減少，及復填之，則沒虛空，非見空出，此無邊空，不復增多，當知是土與石，俱在空內，而土石內，及此土石，未嘗無空，未嘗非空也，土石喻陰陽，空喻道也，卽世間天地陰陽四大五蘊諸妄塵勞，就於是中，未嘗無道。

而非道也。○然此空內清淨本然，皆由衆生無始顛倒狂亂，無明妄想之所變生，一切世界，根身種子，相續不斷，乃有佛法世法等事，若能破妄歸真，真亦不可得，空亦不可得，佛法亦不可得，況其他者乎。○是故佛謂阿難，由汝無始心性狂亂，知見妄發，發妄不息，勞見發塵，如勞目睛，則有狂華，於湛精明，無因亂起，一切世間，山河大地，生死涅槃，皆卽狂勞，鎮倒華相。○又文殊曰：迷妄有虛空，依空立世界，又曰：空生大覺中，如海一漚發，有漏微塵國，皆依空所生，漚滅空本無，況復諸三有。○三有者卽三世也，又佛曰：當知虛空生汝心內，猶如片雲點太清裡，況諸世界，在虛空耶？汝等一人發真歸元，此十方空，皆悉銷殞，云何空中所有國土，而不振裂。○此所謂空者卽衆生無明妄想也，世界卽四大等妄塵勞也，猛省而悟，銷落諸妄，歸其真性妙道也。○達磨直指人心，見性成佛，指人徹見自心本元真性也。○然若其天下宗師等，或所謂打破虛空，掀翻大海之語者，則非此義說。○儒言一陰一陽之道，斯乃謂自後形於有者也，夫有必始於無，且今天地萬物，昭昭然皆在空中，人人具見，是爲有也，此有從無而生，此無之始，不可原極，謂之無極，無極而太極，太極動而生陽，動極而靜，靜而生陰，靜極復動，一動一靜互爲其根，分陰分陽兩儀立焉，然後展轉變化，皆由二氣交感，化生萬物，人畜品類，曾何異焉，倘於無始已前，能著目者，則知道矣，不離當處，超越三界，有何碍乎。○世界者，世卽去來今。○界卽十方也。○又老子曰：無名天地之始，有名天地之母，又曰：有物混成，先天地生，又曰：常德不忒，復歸於無極，莊子曰：夫道在太極之先，而不爲高在太極之下，而不爲深，先天地生，而不爲久，長於上古，而不爲老，冢墓因緣經云：閻浮界內

有振旦國我遣三聖在中化導人民慈哀禮儀具足又法行等經云光淨菩薩又云月光又云儒童彼稱孔子迦葉菩薩彼稱老子月光菩薩又云光淨彼稱顏回吁孔顏莊老豈常人哉

慧揭杲日戒凜嚴霜辯飛懸漢體屹崇崗紫金相好白玉毫光食稟禪悅味匪椒薑宏音至韻沙界鸞翔

鸞丘焉切飛也

號標調御字表覺皇乾上坤下為衣作裳

易卦取象乾天在上故為衣坤地在下故為裳此聖人垂衣裳而天下治象乾坤之無為也○華藏善財參大天神神言我得菩薩雲網解脫李長者云是此界乾坤也其智無依不為不思而恒應萬有故號天神○又參主地神神言我得菩薩不可壞智惠藏解脫李云此界坤神也前乾坤主智圓滿此坤神主悲圓滿大悲厚載萬物長養衆生故○愚謂一切悲智皆佛衣亂況易取象正與斯合然當觀佛毋瞻衣亂

眇視國位遠過虞唐鐵圍犴獄

犴亦作犴並音岸野犬也又野獄曰犴乃惡獸名二十八宿井木屬之犴之為物登山則食虎豹入水而啖蛟龍故陶所造繫囚之處以此獸為名曰犴獄今人略呼獄也所造牢獄之門即作此獸張口食人之狀令其囚人從茲口入如與此獸食之也佛說鐵圍地獄之獄即世間犴獄之名也

爐炭鑊湯

非但爐炭鑊湯而已略言有八大地獄曰活曰黑曰合曰叫喚曰大叫喚曰熱惱曰大熱惱曰阿毘至此八大地獄各各復有十六小地獄曰黑雲沙曰糞屎泥曰五又曰饑餓曰焦渴曰膿血曰一銅釜曰多銅釜曰鐵磔曰函量曰雞曰灰河曰斫截曰劍葉曰狐狼曰寒氷○又有十大地獄各有十億小獄而為眷屬又有孤獨地獄在閻浮提諸處或曠野山間或海畔廟中此則罪輕者入○法苑云宋武當寺沙門僧規因赴白衣家請無病忽死二日而蘇云那夜五更門巷間曉曉有聲須臾五人秉炬火執幡入屋叱喝僧規規遽悅然便以赤繩縛去行至一山都無草木土色堅黑如鐵至一城外有立木長十丈餘上有鐵梁左右有匱貯土約十餘斛有一人衣幘並赤問規在世罪福惶怖未答彼即使吏開簿檢閱吏至長木下取一匱土懸鐵梁上稱之如覺低昂吏曰此罪福秤也汝福少罪多應先受罰俄有一人衣冠長者曰汝沙門也何不念佛我聞悔過可度八難規於是一心稱佛衣冠人謂吏曰可更為秤之既佛弟子幸可度脫吏復稱乃見正平將規至監官前辯之官執筆觀簿久之又有一人朱衣玄冠佩印綬執玉版來曰簿上未有此人名也監官愕然命左右收錄須臾見返縛向五人來官以其濫取人乃鞭之少頃有使者稱天帝喚道人來既至帝曰汝是沙門何不勤業而為小鬼橫收汝命未盡今放還生勿屢遊白衣家殺鬼取人亦多冤濫規曰橫濫之厄以何能免帝曰作福為善○不知此為孤獨獄耶是何處所乎前之所謂八大地獄及諸地獄業報衆生次第受苦不可勝言煩不及錄然皆當人日用現行心地發現耳豈有

他哉凡有知者略宜自勉又所謂孤獨獄者世人親見者亦其多矣不及枚錄善惡報應禍福憲章

佛既曰皇其猶人主之稱遂有獄等條法憲章以律有情

被茲華夏靡間夷美德霑黎庶澤洽侯王疏菩提徑闢解脫場圓裡三際洞徹十方消除幻妄宛轉真常刀鋸莫害謗毀奚傷

左右逢原真常妙道觀此道亂猶若虛空刀鋸雖利莫能損害魔外謗毀果何傷哉譬如調達種種謗佛活陷地獄則佛每稱是我真善知識若無提婆達多不顯如來諸佛功德○又尼暴志以木魁繫腹乃牽佛衣云汝爲我夫從得有娠不給衣食天帝化鼠鬻繩墮地○又旃遮婆羅門女以木杆繫腹云由瞿曇令我妊身應當與我飲食悉皆自受惡報於佛何傷○又昔有羅漢名離越山中坐禪一人失牛覓至其所時因煮草染衣衣變牛皮染草化肉染汁成血鉢孟卽爲牛頭生收付獄經十二年弟子得羅漢者五百人覓師無處業緣欲盡乃知在獄告王乞理王言有僧當悉免之離越聞已踊身虛空作十八變王卽禮曰何因受苦答曰我昔曾誣人一日一夜後墮三塗受無量苦餘殃未盡今受謗業是諸衆生慎勿謗人○又且如叔孫武叔毀仲尼子貢曰仲尼猶日月也無得而踰焉人雖欲自絕其何傷於日月乎○又公伯寮愬子路於季孫子孔子曰道之將行也命也道之將廢也命也公伯寮其如命何○又宋桓魋欲害孔子孔子稱天生德於予○魯臧宣毀鬲孟子孟子曰臧氏之子焉能使予不遇哉○又貉稽曰稽大不理於口孟子曰無傷也士僧茲多口詩云憂心悄悄

愴于群小孔子也肆不殄厥愴亦不殞厥問文王也○此乃貉稽被衆口訕謗無奈而言孟子曰於己德無傷也凡士人益多訕也乃以詩柏舟之篇喻之曰怨小人聚而非議賢者也孔子論此詩孔子亦有武叔之口故孔子之所若也縣之篇曰肆不殄厥愴殄絕愴怒也亦不殞厥問殞失也言文王不殄絕眚夷之愴怒亦不能殞失文王之善聲問也問與聞同去聲名達曰聞○又白樂天曰含沙射人影雖病人不知巧構人罪至死不疑陰德既必報陰禍豈虛施人事雖可罔天道終難欺明則有刑辟幽則有神祇苟免勿私喜鬼得而誅之

猥賤庸鄙傑特豪良歸依信向永懷不忘

貴賤皆歸向而不忘也又信爲道源功德之母雖良鄙有異輒能信入永無妄失

非盡與細豈短兼長排幹

排步皆切推也擠也幹鳥括切旋也轉也運也擠排幹旋之義謂縱能排天幹地而不可以推覓此道也

止遏

不令念起也臨濟曰把捉念漏不令放起是外道法

寂默

默照邪禪

商量

意織搏議。

悉若羸角觸藩羝羊。

悉無解脫之分。

丕哉碩師廓然無聖一綱首舉萬羅目正。

大矣哉碩德之師。○廓然無聖之綱。首初一舉則此宏大宗教萬萬羅網眼眼俱正羅又羅列也。目又名目題目也。節目條目也。

謝遣情意竦動瞻聽以故吾徒受厥餘慶偏局嫌疑孰敢爭競。

傳燈錄曰光統律師流支三藏者乃僧中之鸞鳳也。觀師演道斥相指心與師議論是非鋒起師退振玄風普施法雨而偏局之量自不堪任。

斷臂摠誠立雪披敬志乞安心願承誨命能忍劬勤疇楚誰清。

摠抽居切清七正切立雪斷臂能忍難忍而効勤勞孰有楚痛寒清哉。

花敷乍繁果結終盛寶絲網珠交輝疊映。

以果喻如網珠即謂達磨子子孫孫遍滿大地各各光明盛大重重輝燁映奪無盡也。網珠華嚴疏云帝釋殿網貫天珠而成以一大珠當心次以其次大珠貫穿匝繞如是展轉遞繞經百千匝若上下四面四角望之皆行位相當一明珠內百像俱現珠珠皆爾此珠明徹互相影現影復現影而無窮盡燁音葉行音航。

南北宗傳東西旨定微詰索隱卷舒行令印塵劫事於彈指竟異軌攝職殊門專政聲牙語話

鏗鏘吟詠。

聲牛交切語不入也言辭不平易貌韓文詰屈聲牙鏗丘耕切鏘千羊切又楚耕切金玉之聲也宗師各立門庭共闢玄猷垂機接物猶職與政猶握金鏡以明道宣木鐸以揭化其揆一也劉孝標廣絕交論聖人握金鏡闡風烈注喻明道也離書秦失金鏡。

融今百昔感尊服與牛鬼訶護。

牛鬼虵神訶禁擁護。

龍象追隨崢嶸庠序。

午鬼雄犂之勢犂尼耕切。

都雅威儀。

龍象雍容之狀。

喑鳴返躑獅子鳳兒五家列派四海分枝千古勝範百丈洪規叢林禮樂膠漆附離世代升降損益盈虧。

法道與禮樂關繫附麗也自唐抵今餘五百載時代風俗人情之不同而沿革損益隨之論語謂三代之禮相因損益豈異於斯哉莊子附離不以膠漆。

訓導孔厲咨參勿疲陵谷改換節物遷移亟宜超越其肯羈縻利名岐路廊落畿京智愚清濁河洛渭涇得失憂喜寵辱震驚。

當此滅劫高陵深谷遷變不常節物人壽其速猶甚是宜急求出度若夫欲趨利路名岐則

彼市塵聚落京畿之地，是其所也。然趨彼之者，亦有智而清，愚而濁，即猶彼之涇渭清濁者也。然水固無情，而亦有改遷之不免。況於人乎？且於名利之中，得失寵辱，如雷霆之震盪，可勝言哉！今幸居於叢林之下，宜如何耳。杜荀鶴贈僧詩曰：利門名路兩何憑，百歲風前短燭燈。只恐爲僧心不了，爲僧心了總輸僧。

翔伊屋舍。

父母所生之體是也。翔俗作初，通作創，始造也。孟子創業垂統，說文造法，翔業。

宅爾性靈，眼耳窓牖，手足檐楹，喉腹嗑吸，匏管竽笙。

竽笙二樂器，皆以匏爲之。匏，瓠也。列管匏中，施簧管端，竽有三十六簧，笙大者十九簧，小者十三簧，皆嗑吸取聲。此謂人之腹如匏瓠，喉如簧管也。

朝霞夕霧，閃電流星，倏晞忽滅，暫積時明，切磋窮究，期在俊英，簡略他習，熟玩此經。

人之一身，猶屋舍焉。喉腹之嗑吸，猶匏管之竽笙也。且是身之不堅久，何異朝霞等之易滅，此經者，非所謂此文字語言之經，風穴和尚曰：猶恐耽著此經，不能放下，而我今謂熟玩，寧無愧乎。

帝君

心王也。

將帥宰執公卿。

自帝字至此，共爲八字，以表八數。自將字以下，但爲六字，以表六數。双字義分，則四人唯理。

離合爲一三，以意逆之可也。又大概見後注。

統治疆場。

場音亦。

防禦用兵，擒捕誅斬，保任冠纓，業識昏亂，本末重輕，誓肝礪膽，深刻深銘，折旋俯仰，揣摩權衡，臨枝鳩拙，狗苟蠅營。

猶四大蛇歟，風火性輕，譬鼯及蠅，有枝而能營，地水性沈，喻鳩與狗，鈍拙而苟且，然一靈真性，湛然精明，無如是事，以有久居四大幻軀，遂妄迷真之者，染習其氣，以茲習氣，欲紹空王大法玄祚，皆不可得。

謀

心機計議，猶臨用枝。

置

弃置唐損，如鳩以拙。

倚

營營腥臭，如蠅依倚。

伏

卑鄙不振，如狗偃伏，又世間一切相因之事，曰倚伏。老子曰：禍兮福之所倚，福兮禍之所伏，孰知其極。

墜墮覆傾，捨父逃逝，孤苦零丁，何由中外，而獲父寧。
父音慈，治也。

群魔最負。

最平祕切，手韻凡利切，負虛器切，用力壯貌。

六賊縱橫，匹偶親屬，締構同盟，盜掠財賄。

掠音略，劫奪也，賄呼罪切。

墮壞典刑，夙興夜寐，聚神會精，復我穹壤，水綠山青，完余邦邑，考妣合并。

欲玩此經，則如帝王治其邦國，使諸將帥及衆臣下，用兵征伐，同保冠纓之位，貌也。雖諸衆多，本唯一人，變化離合，善惡不定，或爲三身四智六度萬行，或爲三毒八識六處五陰，大概如此，乃至八萬四千無量無數染淨塵勞功德，不可數也。善則俱爲忠臣，否乃盡成逆賊，斯乃唯在主者於業於識之昏亂，或本或末之重輕，於折旋俯仰之中，揣而察之，權衡其重輕，乃磨礪其肝膽，猶貞石之堅平淨潔，深刻而銘以記之，然倘如臨等，或用枝或唯拙，或苟且或經營，及機謀奔置倚伏之事，是悉取其家國之覆傾，而自逃逝也。由是生死魔軍之衆，得乘其便，最負然以力壯六賊，而合縱連橫也。是魔賊等，則乃偶結爲親爲盟，劫掠法財，破壞法度，既乃如是，當於晨夕，自奮以悟爲期，復我之乾坤邦國，乃享本來山青水綠，太平無象之境，而亦不失方便之父，智度之母可也。

雲臺月殿，露榭風亭，幽宮邃館，廣廈脩城，朱甍畫闥，綉戶彤庭。

邦國既復，父母俱會，則有是等諸處安樂受用，此卽十二處根塵歟，不復爲賊，而化爲自家臺殿，可於其中遊戲自在也。

孕育氣概，變化冥督，士弘熱勸農力穡，文武官僚，土穀社稷，品級雌雄。

雌雄者，乃賢鄙勝負之義，如曰決雌雄者，卽是辨別賢鄙勝負也。賢勝爲雄，鄙負爲雌，品級上下，進退賞罰，由是決之，此乃禽鳥之雌雄故，亦借爲英雄字也。凡大丈夫必慕雄飛，不肯雌伏，是矣。禽之抱卵曰伏，扶富切。

退黜進陟。

都邑宮館，不可悉數，而週覽聊舉，雲臺等耳。蓋有道之邦，渠渠廈屋，廣覆含攝，而有孕育品物，變化陰陽之氣象，以小喻之，在於朝廷，則畜養萬姓，弔民伐罪，辨別賢愚，進退百官，共安社稷，在於宗門，其揆一也。至於垂範化物，指呼萬類，轉凡成聖，令其人人皆復祖父田園，無盡受用也。

加來達莊，虛豁曠直。

無來無去之大道，本無名字，強借達莊途路，喻以言之，謂此道非塞非曲，如下文雞啼等是也。

離啼犬吠，宣詔制勅。

一切聲，是佛聲。

寸草莖芽，瑰顏偉色。

一切色是佛色。

甘蔗根苗，苾芻栽植。

世尊別姓有五，一瞿曇氏，二甘蔗氏，三曰種氏，四舍夷氏，五釋迦氏，苾芻西國草名，含五義之多，而不譯，一體性柔軟，喻出家能折伏身語，魚鱗二引蔓旁布，喻傳法度生，延綿不絕，三馨香遠聞，喻出家戒德芬馥為眾所聞，四療疾病，喻出家能斷煩惱毒害，五常不背日光，喻出家人常見光明，所以比丘得以此草為喻，而稱為甘蔗種之後裔也，曠古猛切。

奕葉聯芳，彌綸罕極。

彌綸猶纏裹也，言周帀包裹於無窮之地也。

滋蔓芊綿，頗甚近卽。

就中而不遠也。

澡慮猛省。

洗滌心慮，而深省之。

詎待驅逼，挺拔淪溺，稜磔沈寥。

稜磔音陵歷，踐踏也。

踟躕擬議，迂曲迢遙，槌拂控引，棒喝呼招。

頃刻不進，則於此道返成曲遠，故有拈槌豎拂，行棒行喝，舉令之事。

齊眉共躅。

正知正見，與師無異者。

犯，貫違條。

超越格量者，又謂之出格道人，以下六句，當以類觀。

顛頂儻侗。

顛頂卽儻侗也，譬如有人，面大而肥，眉目無宏隆之分，頸洪於腮，肩顛無圓臣之別，又如有人，欲為樽罍栴檀之物，先成坯素之朴，略似而不似，此喻宗師或有提唱之語，不分曉著明者也，嘗見他書有注此字者，顛頂注曰：大而儻侗注曰：未成器也，直也，是則固是，此乃廣韻中注，其誰曰非，若欲顯明用處之意，則亦關於方便善巧耳。

鑿琢錫影。

喻宗師或造作語句，巧妙細密，猶如彫金刻玉，琢雪鏤冰也。

冰壺耿介。

潔清拔俗之貌，以所守之節，堅正不移，纖塵莫染。

闍市飄飄。

入於塵中，魚行酒肆，恣意遨遊。

當身宇宙，獨步丹青，磨礪拋礪，拓鉢負箱，鞦韆毬舞，窺壁面牆，盤裏竭款，裂膈抽腸，知識為人，互作主伴，應人間世，或示齊眉共躅，乃至獨步及於面牆，是諸所作，是皆罄竭其誠款，猶裂其膈，抽其腸胃，而相為之徹也。

汰淘珂貝，播揚糝糠，假途資斧，旅次糲糧。

所謂相爲者，卽是淘汰也。淘汰其人，如珂貝之玉粒，去其砂石糝糠，欲其純粹，無有查滓，以作假借途路旅次之用。期到家耳。明教曰：以如來爲家。

燕居鴻漸。

燕與宴同。凡夫緇侶居則禪宴，出則有序，如鴻雁之有漸次也。百丈曰：上堂陞座主事，徒衆雁立側聆，是也。夫音扶，語詞也。

蟻穴蜂房。

黃魯直題落星寺詩曰：密房各自開戶牖，蟻穴或夢爲侯王。謂寮舍似之也。又一首內曰：蜂房各自開戶牖，處處煮茶藤一枝。

躋陸堂室，燈燭熒煌，鯨鐘鼙鼓。

鼙亦作鞀，並音陀，魚名，皮可冒鼓。詩鼙鼓逢逢，逢音蓬。塵柄猛床，砒堇鳩毒。

董渠各切，毒草也。唐方士張果先生，有長年秘術，自言數百歲，則天召見，以問飲董汁無苦者，真奇士也。乃以賜之，果飲三卮，醺然如醉。顧左右曰：非佳酒也。頃之齒悉焦黑，取鐵如意擊以墮盡，少選新齒粲然。

酬醉杯觴，絕後再蘇，汔可小康。

汔許乙切，爾雅音蓋，近也。期也。其也。幾亦音祈。杜預云：字雖別，皆近義。言其近當如此。毛詩

大雅民勞之文也。

頑癡懵懂。

不惠而心無所知者。

勉使試嘗，踳躅荏苒。

踳躅失道也。荏苒猶侵尋也。苒染同。

愧耻慙惶，遊刃旁礴，周帀備詳，區別寒暑，組織炎涼，暗鳴叱咤，奔躍騰驤。

如欲理會此事，直須遊刃肯綮，旁礴萬物，乃至區別組織，洎叱咤騰驤等作，使文武兼備，八面受敵，無窮玄用，不盡妙機，庶昭宗極，切勿偏枯局在一隅。

鈎錐砭筍，辨驗存亡。

砭破驗切，石針刺病也。宗師垂示言句，或似之也。以學者虛實之病，未免痛下錐筍，以攻之，觀其所謂主人翁者存耶亡乎，然後療治，故有使學者入室之作，此乃特爲鈎錐砭筍也。高庵悟和尚，每見衲子室中，不契其機者，把其袂，正色責之曰：父母養汝身，師友成汝志，無飢寒之迫，無征役之勞，於此不堅確精進，成辨道業，他日何面目見父母師友乎。衲子有聞而泣涕不已者。

履踐讀誦，登臨歌嘯，希鯤慕鼈，投竿擲釣。

修持操履，讀誦經書，乃至登臨賞玩，詠歌舒嘯，悉是欲釣大身衆生之鈎餌也。大身衆生，卽大乘根器是矣。○宗師一切施爲，未嘗不是爲人向上提持，接向上人，但衆生根器下劣之

者不能領悟而彼舉心動念悉作世相解之否則目爲禪道佛法俱成塵勞皆不是也。○故釋尊曰如我按指海印發光汝暫舉心塵勞先起斯之謂也。○又曰不求無上覺道愛念小乘得少爲足疏曰無上覺道如寶所小乘涅槃如化城。○愚嘗覽此莫不掩卷長歎此乃大教明文若是奈何雖吾門上士而尚於小乘者比比有之抑而又有以助道之事自爲究竟者吁佛之道衰其在茲乎。○然佛又曰我滅度後敕諸菩薩及阿羅漢應身生彼末法之中作種種形度諸輪轉或作沙門白衣居士人王宰官童男童女如是乃至姪女寡婦軒僮屠敗與其事稱贊佛乘令其身心入三摩地終不自言我真菩薩真阿羅漢泄佛密因輕言末學如是則亦豈知此等卽菩薩等化身逆行而順化耶孰曰其非若夫以卽此所謂履踐等事言之而其豈亦不然乎哉。○海印事釋者以大集經云閻浮所有色像大海皆有印文喻佛如來法身性海普現一切妙用之光。○教中以大母指點中指中節謂之海印三昧。○蕩滌理致銷鑠美妙。

從上佛祖聖賢所有言教及一切因緣嘉好甘美微妙之處是皆療衆生心病不見道體之良藥色香美味也病去則無用矣然作是說亦乃誘初學耳若其從上先覺真正提持而易容寄心意識於其間哉。○又且如有人已能至於微妙殊勝境界之者誠可慶慰然未見於道耳。○且大凡師匠萬種千般方便爲人或拈一機示一境是皆眼觀東南意在西北味之者或誤謂斯是附物顯理卽色明心理事融通色空無礙吁審如是則達磨一宗滅矣。○且佛教法莫大華嚴而現量境界理事全真初無假法所以卽一而萬了萬爲一一復一萬復

萬浩然無窮心佛衆生三無差別卷舒自在無礙圓融圓悟和尚謂張無盡曰此雖極則終是無風雨之波到此與祖師西來意是同是別張無盡乃真參實悟禪教貫通深入宗門之奧者而答曰同圓悟撫掌曰且喜沒交涉無盡失色圓悟曰不見雲門云盡乾坤大地無絲毫過患猶是轉句不見一色始是半提須知有全提時節彼德山臨濟豈非全提乎無盡矍然以手加額云雖真淨老師亦不如是之審。○此乃古今共知之者因言理之一字引至於此然乘便并爲一註無盡曰同及失色并以手加額處乃是三枚毒箭然箭是暗箭圓悟不知而繞繞耳圓悟則且置請爲無盡代別之一無盡不須曰同但云再舉一偏看二不須失色但以手自擱其口三不須以手加額云云但吐舌示之。○又圓覺曰一者理障礙正知見二者事障續諸生死。○又石頭和尚曰執事元是迷契理亦非悟。○愚謂縱使理事不涉尙隔雲泥饒尼交切。

原是大猷肇初微笑。

推此莫大宗猷蓋因迦葉微笑之初而至於此日也。

雙眸既開。

迦葉之笑眼。

八紘炳曜赫並晨曠瞳矐久照紹續繼嗣唱高和邵。

迦葉之祖作倡於前既高而其繼紹子孫和之於後亦邵邵亦高也美也所謂年彌高而德彌邵者是矣。

雍容能度，廊廡寢廟。

上句言今梵侶之威儀，下句言今寺院殿宇之規制也。寢廟者，前曰廟，後曰寢，今之曰方丈者，謂之寢室，大者曰寢堂，室則幽奧深邃，堂乃堂堂明顯也。今法堂者，正謂之堂，佛殿可曰廟也。○東土建寺之始，自漢明帝白馬寺也，是後朝代數數建立，至後魏大盛，世宗之朝，梵僧之至，餘二百萬，寺院三萬餘所，塔廟之盛，無出於此。至於自作瑤光寺，永明寺，胡太后作永寧寺，石窟寺，悉在宮側，皆極土木之美，有真金像高丈八尺，又如中人者十軀，爲浮圖九級，高九十丈，於上立刹，復高十丈，每夜靜，鈴鐸之音，聞十餘里，與夫佛殿三門，高廣嚴麗之勝，世未有也。僧房千間，珠玉綿綉，駭人心目，自魏之後，諸朝又不知其幾也。○如梁武謂達磨曰：朕即位以來，造寺寫經，度僧不可勝數，凡今寺，或言蕭寺，說者曰：蓋寺乃蕭梁造也，茲概可見。○然是時亦未嘗有所謂五山十刹等名，但始於趙宋之末耳。時以明州史氏相天下而爲之，又史相復自鼎建墳寺，曰大慈，重重樓閣，亦偉焉矣。置其常住產業之多，人論以明之，天童育王，雪竇二山一十刹，總計其三寺之物，以一之，亦不及其一大慈也。而又自明至杭，幾五百里，凡二十五里，並置一接待，皆以建立畢備，悉如大慈，命十方住持演法安衆，爲叢林之所，進退主職，悉由公舉，無一私於己也。至今百數十載，其制儼然，親目所擊，今之元朝，往往新寺尤多，又於每州各建一帝師寺焉。

毛端刹境。

刹境者，卽世界也。一日月，周行四天下，光明所照，是爲一世界。○如是一千世界，謂之小千。

○如是一千小千世界，謂之中千。○如是一千中千世界，謂之大千。○是爲三千大千世界，卽一大世界也，名一佛刹。○世界之下，風輪所載，風之上水也，水之上浮以大地，大地正中，有須彌山焉，又名妙高，道曰崑崙，亦曰玉京山之頂，四面有峯挺出，曲臨向下，峯之下，乃有三級。○下級爲堅首天，住，中持鬘天，住，上常橋天，住，此上東西南北，日月星宿天，處虛空中，猶如浮雲，終不墮落。○山之四旁，上鄰日月之處。○四王天，住，又名護國天王，道曰四聖，是謂東天蓬，南天猷，西翊聖，北玄武也。○此乃須彌之半腹耳。

此四天王天上，超日月明，居人間頂，曰初利天，四旁各有八天宮殿，及中之一，名三十三天，大智度論云：昔有婆羅門，名摩伽，姓憍尸迦，有福德大智慧，與知友三十三人，共修福德，命終皆生須彌山頂第二天上，三十三人爲輔臣，摩迦婆羅門爲天主，卽帝釋也，亦曰釋提桓因，又名須彌山王，道曰玉皇，儒曰昊天，又大毘婆沙論云：或名鑠羯羅，或名補爛達羅，或名莫迦梵，或名婆颯縛，或名憍尸迦，或名舍芝夫，或名印達羅，或名千眼，或名三十三天尊，乃有帝釋千名之謂，此卽一世界之主也。

又切利天上有夜摩兜率陀樂變化，他化自在。○如前六天，至於下方金剛水際，悉爲欲界。○兜率陀此云樂知定，按華嚴乃諸佛菩薩再來，設化度人之處，及等覺菩薩聖果將圓，所住之天，其上色界樂寂心多，而下諸天，過於放逸，惟此得中，三界會中，猶如幅湊，爲三界福惠自在圓滿清淨第一之天，上生經云：樂欲長菩提者，來生此天，今二子爲斯文請作，復與多衆勸力刊行，菩提之心有在，又復與夫後之凡獲覽者，亦豈異哉，並願共生此天，効彼

諸佛菩薩之作，不亦美乎？稜嚴云：乃至劫壞，三災不及，然阿含在上，見後注於欲界上，而有梵衆、梵輔、大梵王。○一切世間，此天所造，此即千世界之主也。○若斯三者，名初禪天。自初禪之上，有小光、無量光、光音。○此三勝流，乃曰二禪。○阿含云：火災至此爲際。從二禪以上，有少淨、無量淨、遍淨。

○此之三位，是爲三禪。○阿含云：水災至此爲際。○由三禪之頂，有福生、福愛、廣果、無想。○右是四類，其號四禪。○阿含云：風災至此爲際。○逾四禪，向上有無煩、無熱、善見、善現、色究竟，亦曰摩醯首羅，亦曰大自在天，此天謂言盡虛空界一切衆生，皆從我出，此即三千大千世界之主也。○其茲五級名不還天，亦名淨居。○此乃色界，至此而極，自下梵衆至是十八天，總名色界。

越於色界之上，復有無邊空處、無邊識處，無所有處，非想非非想處。○是四空天，爲無色界。毘婆沙論如說：下方世界無邊，此中以上下重累，謂從此界風輪之下，虛空懸遠，有下方色究竟天，彼下展轉，乃至風輪，次下復有色究竟天，展轉向下，乃至風輪，如是展轉，下方世界乃至無邊。○又從此色究竟上，虛空懸遠，有上方風輪，彼上展轉，乃至色究竟天，次上復有風輪，展轉向上，乃至色究竟天，如是展轉上方世界，乃至無邊。○所謂世界，在虛空中，虛空無盡，世界亦無盡也，如是之外，八方上下，又各有無量阿僧祇世界，恒河沙數世界，盡虛空不可說數世界，不可窮盡。○如華嚴蓮華藏世界品所說：十方世界之多，不啻如細雨密霧。○又圓覺曰：恒河沙數諸佛世界，猶如空華亂起亂滅。○大地既在空中，乃有震動之事，佛

言其緣有八：地在水上，水止於風，風在於空，空中風大，有時自起，則大水擾，水擾則動，是一時有得道比丘，比丘尼及大神尊天，觀水性多地性少，欲自試力，則動，是二。若始菩薩從兜率天降神母胎，專念不亂而動，是三。菩薩出胎，專念不亂而動，是四。菩薩初成正覺而動，是五。佛初成道，轉無上法輪，魔若魔天、沙門、婆羅門、諸天世人，所不能轉，則動，是六。佛教將畢，專念不亂，欲捨性命，則動，是七。如來於無餘涅槃界，而般涅槃時，大地震動，是爲八。

摩斥觀眺。

摩亦作揮，搗摩戲，並吁爲切，斥音尺，手指赤指而言之也。莊子伯昏無人曰：夫至人者，上窺青天，下潛黃淵，摩斥八極，神氣不變。○此謂總紹於迦葉之子孫，而具肅穆之體，則於廊廡寢廟之間，陞堂入室，大坐當軒，以無邊塵毛刹境之事，指搗揭示，使人觀覽，然李長者云：無邊刹境，自他不隔於毫端，十世古今，始終不離於當念，是則又奚須特地爲哉？然亦是亦理也。非祖師西來意之可方擬，又若夫宗門極唱，亦豈言於是也，方便門中聊爾耳。

言喻因及。

此事不可以言語譬喻能及，如來以一切譬喻說種種事，無有譬喻能說此法，以故心智路絕，不思議故，余何人哉，言喻能及。

賢警母誚，謔聞達者，聊自警也。

宗門千字文終

是作皆由所請也。請註始以千餘言，割其語脈，借貫之處而已。人以太簡，乃有筆條其綱目者，口指其要節者，俾益註從而增至若干。藁草既就，又復請爲句點。二三子爭之，或曰：不宜點，或曰：點乃善。問其故，謂不宜者，恐致人之譏也。謂善者，特欲以利於初學也。請斷，余曰：是則不可避，其不利於己之譏，而無利於人也。鄭子產作丘賦，國人謗之，子產曰：何害？苟利社稷，死生以之。然丘賦誠有妨於人而致謗也，子產以利社稷之故，不以其爲害，況茲加點於所託之空言，唯我之勞耳，抑而能利於人，而無妨於人者，又且所謂自警也，而豈欲示於人哉？今又以諸子之請，益非出於己意，乃從以請，固何害哉？衆曰：善。於是乎點之，并注於茲。

自前第一紙至此第十七葉，除四衆人名外，共計萬單三百八十九字，後紙釋問第一葉，聯此則爲十八紙也，字數在後。

釋問

宗門千字文，繕書既畢，二三子再趨而有問，作釋問。

○問曰：一切所作，皆有由緒，辱和千文，旨卽偈頌，然偈頌之作，雖知談道，初始根源，實未能悉，重願大慈，釋我寡聞。

曰：本佛祖也，如諸經偈，七佛偈，諸祖付法偈是矣。梵語有二，一伽陀，此云諷頌，亦云不頌，謂不頌長行，故或名直頌，謂直以偈說法，故二祇夜，此云應頌，謂頌長行也。古德嘗論之，謂或爲鈍根重說，或爲後來之徒，或爲增明前說，余謂其猶東土詩賦歌頌等文詞耳。偈者言詞也，經偈則曰，而說偈言，文詞則云，而爲詞曰，詩賦等作，或先序而後爲詞者，或不序而竟爲詞者，序則不以律調音韻，唯散述其事者，猶長行也。然非無音韻，如風行水上，鳳鳴空中，但不拘拘耳，詞則卽詩等，必以律調音韻者，猶偈頌也。詩者志之所之之謂也，然詩無過諷刺嘲咏而已，且曰：動天地，感鬼神，宗門偈頌，唯是發明佛祖大事，非達佛祖之知見，孰能爲之。頌者誦也，稱述也，美盛德之形容，歌誦盛德也，謂以偈言稱頌其事，以美其德也。所謂游揚德業，褒讚成功是矣。而佛菩薩正當宣揚之時，皆以寶音梵唄，演而爲微妙清雅之韻，悠揚諷咏，優遊彬蔚，婉而成章，乃涵不盡深長之意，令人樂聞，今茲翻譯，莫能寫之，唯按其大意耳。是故經偈，亦無有押韻也。東土諸祖，始稍體之，是皆悟明通達，衝口而成，非假造作，法滋既久，華竺兩狎，人心轉巧，機變迭出，遂寄調於風雅之音，播揚西來不轉而傳之意也。且前所謂詩者，止乎六義而已，宗門

玄唱則有儼若含於六義者有超然於六義之表而絕去世間翰墨畦逕之外來不知縱去不知迹非意可求非情能測若或體其所蘊經偈之作則逼似之唯其達人千變萬化所謂青出於藍冰寒於水而成聲聲者歟自古至今代不乏賢然雖近今而能超於前作者時亦有之第不多耳又有頌古之作譬之儒家則猶詠史也復幾數百載矣蓋始於宋國初汾陽是時尊宿皆悉渾厚蘊藉不尙浮靡天禧間雪竇以辨博之才恢宏其音莫不卷舒抑揚縱橫得妙後之作者莫出其右然亦有以其美意變弄求新琢巧變其宗風失古淳全之作矣至於景定咸淳之間所謂大道衰變風變雅之作於是雕蟲篆刻競之做効晚唐詩人小巧聲韻思惟煉磨而不能頓除勉隨其時曲就其機亦復不拒來命時或秉筆觀面信手賦寒所需聊爲方便接引之意也然以其音律諧和與夫事理句意俱到而活脫者使或哦之誠亦可人然譬如食蜜中邊皆話宜乎人其愛之若夫欲濟飢餓不可得也

○問詩等律調音韻可得聞乎

曰此特文人才士之習氣耳奚必泥哉且詩人亦有言曰論畫以形似見與兒童鄰作詩必比詩定非知詩人此乃東坡先生語也達哉斯言況宗門耶抑詩非余業詎能言之律調者常聞黃帝使伶倫自大夏之西崑崙之陰取竹於嶺谷生其厚薄均者斷兩節間制十二筩吹黃鐘之宮以聽鳳鳴其雄鳴爲六雌鳴亦六陽六爲律陰六爲呂六律六呂總謂之十二律以述十二月之音氣律者一曰黃鐘十一月二曰大簇正月三姑洗三月四蕤賓五月五夷則七月六

無射九月已上爲陽律呂者一曰林鐘六月二曰南呂八月三應鐘十月四大呂十二月五夾鐘二月六仲呂四月已上爲陰呂調者以其律呂合和喉齒牙舌唇之五音而成雅韻作之歌詩被於絃樂故舜命夔典樂曰詩言志歌永言聲依永律和聲也且韻之一字有韻度之韻有所押音韻之韻前所謂經偈無韻者謂無押韻也倘有之唯譯人弄巧耳豈竺土音韻同哉然且古詩押韻亦乃或有或無者有之略髣髴以音聲相近者有之其功諧之者固不在言矣如帝庸作歌五子之歌至於周詩三百關雎首篇五章即可見也此乃詩之原本得之於心應之於口自然所吐如風吹水散漫動蕩天然成紋故易曰風行水上渙以是觀之豈假苦思安排而成之哉後之作者無過摸倣前人而已然亦有不至焉至漢蘇李始爲五言詩亦是混然天成絕無痕迹自此而降猶百川競注其流多矣更變體制亦不一也齊梁間乃有平頭上尾蜂腰鶴膝大韻小韻旁紐正紐之制至唐詩爲大盛唯李杜獨冠古今謂李聖杜史是後韓柳以文爲冠詩亦不出其下或得韻寬則泛出旁韻乍離乍合縱橫馳逐或得韻窄不復他吐以顯其奇能此皆古體也又有今體格法莫知其幾如唐鄭谷與齊己等所定者有葫蘆韻轆轤韻進退韻又有雙聲疊韻至於音聲對法瑣碎萬千然所謂詩者賦頌銘贊文誄箴詩行說吟題怨歎章篇操引謠謳歌曲悉謂之詩宗門偈頌乃物外之談雖聊協以韻唯在臨時變化豈論此哉若夫規規求以瑣屑體制即是世間蹤跡之言豈達道者耶 簇亦作族並千候切射音亦永音詠

○問何謂平頭上尾蜂腰鶴膝等制

曰平頭第一第二字不得與第六第七字同聲如今日良宴會觀樂難具陳今觀皆平聲日樂皆入聲也上尾第五字不可與第十字同聲如青青河畔草鬱鬱園中柳草柳皆上聲也蜂腰第二字不得與第五字同聲如聞君愛靚妝切欲自修飾君粧皆平聲欲飾皆入聲也鶴膝第五字不得與第九字同聲如客從遠方來遺我一書札上言長相思下言久離別來書二字皆平聲也大韻如用聲鳴等字爲韻上九字不得用驚傾平等字小韻除本韻一字外九字中不得兩字同韻如遙條不同句旁紐正紐十字內兩字雙聲爲正紐若共一字而有雙聲爲旁紐如流六爲正紐流柳爲旁紐靚音淨札則八切紐女九切

○問葫蘆等韻又何謂也

曰葫蘆前三後四以前三韻同一韻第四韻則他叶也又謂之漏底格又曰跳珠韻輻輳雙出雙入以前二韻同一韻後二韻他叶同一韻進退一進一退也卽一出一入又名出入韻雙聲此言對法如黃槐綠柳又如秋露香佳菊春風馥麗蘭是也疊韻如彷徨放曠又如放蕩千般意遷延一片心是也若雙聲疊韻者甚多試再舉一二如幾家村草裡吹唱隔江聞此二句除裡聞二字餘八字乃四箇雙聲也如月影侵簷冷江光逼履清此疊句也又蝶煉在東鴛鴦在梁雙聲也又梁武帝云後牖有朽柳劉孝綽云梁王長康強又是雙聲又是疊韻也鴛於袁切鴛於良切

○問竊聞說法亦復有諸體裁是否

曰世間萬事何一而無體裁也然若夫唯守體裁而已者是亦不足言者也參到學到機熟心

通然後絕去陳腐超脫繩墨縱橫卷舒妙出天然豈世規矩以定方圓然名目既多臨時應變用在隨宜無施不可

○問名目之多者何

曰居常說法如今之所謂上堂者是一或因種種事者或遇時節者或名德尊宿至他寺彼請陞座者或檀那請或陞座或小參或普說并諸凶吉坐立大小佛事及頭首秉拂諸等佛事也

○問名德尊宿至他寺陞座嘗聞叢林商量須具主賓而有不當便拈拄杖等事之說如何

曰講說有之然有可取有不可取若曰不當便拈拄杖謂之不知賓主者此誠俗談不足取也何則且尋常納僧或爲專使持書送信或得來參或偶爾經過或常居座下或驀忽相逢作家相見縱橫逆順賓主歷然觀瞻之者不暇眨眼唯箇中人方能點首耳而況名德尊宿過訪主人爲大法故先爲引座謙恭叙謝拜屈尊慈盡誠委託踴聽未聞唯恐固辭不肯承命主既慙懃賓當受請賓座一登則我爲法王於法自在彼此忘情互相酬唱同建法幢何拘小節抑且善於詞命者莫不著著超方頭頭回合豈世膠柱調弦之論而可擬哉

○問復聞頭首秉拂宜具主賓其禮猶甚是否

曰此則不在言而可知何哉若以名德尊宿視之頭首猶霄壤也且凡居其座下一人爲主多人爲伴悉皆謂之參學唯前堂一職或是已曾出世名德西堂者則又殊別名曰分座說法謂之平分風月其庶幾乎得少自在也然賓則始終賓主則始終主主賓有禮上和下睦且禮者亦人之大論其可忽諸其次頭首賓座高陞由茲初步舉心威儀悉宜恭謹而況主賓其不存

乎。雖或主者寬仁大度，不以瑣瑣規責其下，然多衆旁觀，識者晒焉。
○問：今之乘拂問答提綱，敘謝等事，失真之甚，無一可法，以其久久循習成弊，牽之莫返，第恐
誤累後昆，玷辱先哲，以訛傳訛，綿綿不絕，深爲害也。願師不惜腕力，筆條其非，拯濟淪溺，以爲
何如。

曰：不可也。何哉？水潦鶴之流既衆，阿難者已之嘲，況已衆矣。而又豈特乘拂一事而已哉？抑非
賢者所爲，而又安能以其之非，寄吾不腆之筆端耶？雖痛叢林日就凋喪，宗祖宏綱隨之頹委，
豈忍無言，然觀近今，數有賢達遊歷大方，博致前古智眼，既明不墮覆轍，天然超詣，足可觀光，
是爲有道者也。於是才智之士，日就正焉。一無瑕類，唯餘朽腐，無知自爲罔罔，弗之思耳。固何
害哉？抑又當今，俊人迭出，天資益勝，業精內外，思出天淵，西來墜緒，悉能披究，不日之間，常見
障百川而東之，回狂瀾於既倒，吾之與子，固無憂矣。然且毋使將來聞此俗惡，以是之故，固不
可也。所謂提綱一事，昨因曉仁藏主見問，一時之間，聊會批答，益在於茲，不復重舉。
○問：百丈龜鏡，開示衆僧，故有長老今多不爾何哉？

曰：轉大法輪，延洪惠命，接引後學，開整人天，長老之職也。然必欲以其搖唇鼓舌，舉古明今，始
爲開示，則亦劍去久矣。勿以波瀾便謂通達，未應抽訥，卽曰愚癡。黃檗曰：牛頭橫說豎說，未
有向上關。辰子，余初意謂其抑揚也。洎閱牛頭錄，豈抑揚哉？茲其一端。若夫天下宗師，各各用
處各各不同，魯祖面壁，祕魔擊叉，若是之者，千差交橫，倒指莫及。至如五家宗主，臨濟之用，則
如青天霹靂，陸地波濤，用白拈手段，殺活自由，雲門則截斷衆流，不容擬議，顧鑿之間，東涌西

沒，曹洞則君臣道合，偏正回互，金針玉線，體用雙全，爲仰暗機，義海父慈子孝，具險崖句，用陷
虎機，法眼句外投機，箭鋒相拄，句意俱合，卽物契神，梗概如此。若其沛乎浩若，如長江大河，深
溟巨壑，於中含洪吐吞，萬狀惶惑，而又曷可勝言。至若古今尊宿言詞，一一作用殊別，淺深未
易殫舉。且如今之五燈所載古德先賢，莫不悉是大善知識，所收機緣語句，莫不皆謂向上提
持。然於中間，不無水乳，當其披覽之時，若不具擇法眼，未能分別是非，卽不能分，卽是隨波，自
混見源，見源既混，雖彼開示，了莫能識。有如子等精敏過人，能幾何哉？子等所問，其志有在，且
有三寸舌，而不能說法者，名啞羊僧，況其職乎。然宗通說通，卷舒自在，建立掃除，演說單提，萬
種千般，旁午對機，當陽有準，想已洞達，豈以未至，及以來知，并以妄傳，他時後日，妄酬來學，豈
替後昆，宜慎詞哉。

○問：又有知識，無有言語，開示於人，唯以一棒一喝如何。

曰：是其所得三昧也。然若論真正舉揚，此猶假借。若論全體作用，此太輕微。然其乃是德山臨
濟之作，孰不欽哉。然則第恐後來太多之耳。且臨濟德山，唯棒與喝而已矣耶。

○問：行化倒脫，坐脫立亡者如何。
曰：助道之法也。若夫欲起中下之流，生敬信者，無出於此。世俗謂之臨終得大自在，以驗當人
平生行履。而又有此希罕奇特之事，誠可服於人也。然則若其大法不明，縱能現十八變，至於
金棺自舉，化火自焚，亦徒然矣。今夫中下之流，見有是者，莫不叩頭傾心，而尊仰之。若於古德，
或有臨終自作怕怖，及其種種非人所欲之狀，至於所有言句，亦非其人而能測者，雖載傳錄

覽之、之者目瞪口呿、十萬八千、勿謂中下而上智果位中人、亦有之矣、寂音尊者作僧寶傳、至瑞鹿先禪師、有我也、弄不出之語、則於其贊詞中、并舉洞山曰、吾閑名已謝、臨濟曰、誰知吾正法眼藏、向者瞎驢邊、滅寂音以此三語而曰、予每怪前聖平口機辨、皆不可犯、至於臨終之日、皆弭光泯氣、寂音之言如此、又於其後、復嘆之曰、其有旨要乎、愚嘗覽此、不覺失笑、子其勉之、又所謂行化倒蛻等事、而又豈止是而已矣、如達磨隻履、普化空棺、諸希有事、世乏有識大達明眼之者、一等之人、妄謂達磨以胎息傳人、謂之傳法救迷情、遂至渾身脫去、謂之形神俱妙、人間厚愛此者、則懼臨終悻悻、競妄習之、至於以下日月、聽樓鼓、驗玉池、覘眼光、以爲脫生死法、誑說閻閻、貽高人笑、此乃圓悟和尚、深斥其非、大略如此、詳著心要在其下卷第五十九紙、毋惜檢閱、然則若以自家心孔一開、亦不在於言耳、否則閱其他人紙上之語、雖過千徧、復何益哉。

○問、助道之法、其數有幾、而又師所助者、亦以是乎。

曰、吁、有其道者、或以助之、是吾於道尚無有也、助何庸哉、思之。又其數者、如教所言、而有三十七品、以愚見之、非止此耳。

釋問終

跋

竺仙梵和尚之宗門千字文、予未閱古板、屬者適得書本也、雖不知有刀刁魯魚之訛謬、然恐此書泯滅、而不傳將來、幸依書林氏之請、病間一覽、加和訓以令、綬梓、庶幾具眼者、改削之、贊于惠日峯下天得禪庵。

于時慶安四辛卯曆純吉陽辰。

大正十四年十月廿七日印刷
大正十四年十月卅日發行

不許複製

國譯禪宗叢書
第二輯

編者 國譯禪宗叢書刊行會

東京市神田區錦町一丁目十六番地

發行者 宮下軍平

東京市小石川區指ヶ谷町二十二番地

印刷者 鈴木梅太郎

東京市神田區表猿樂町二番地

印刷所 三誠社印刷所

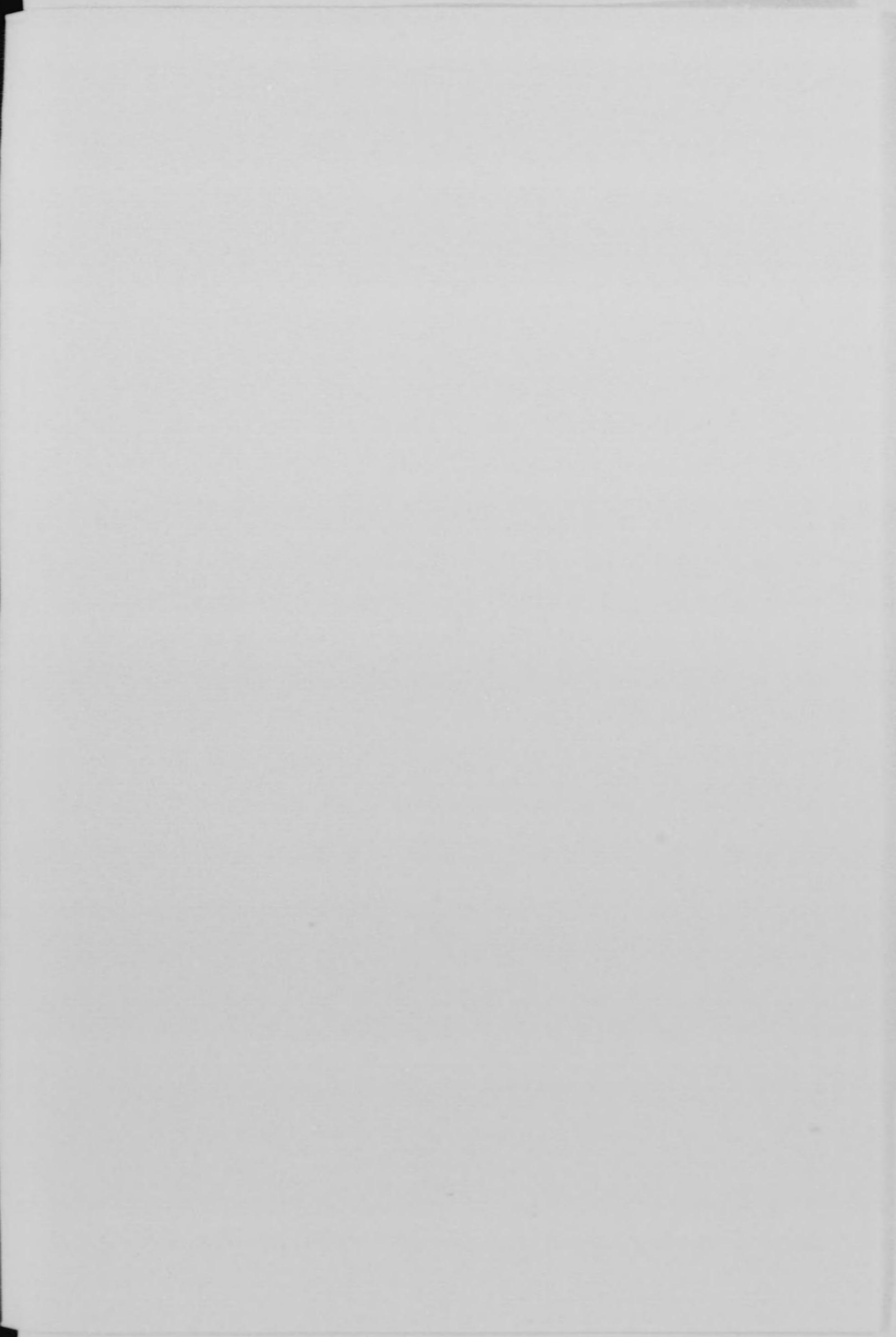
發行所

東京市神田區錦町一丁目十六番地

國譯禪宗叢書刊行會

振替口座東京四六〇一六番

2-4055-



終